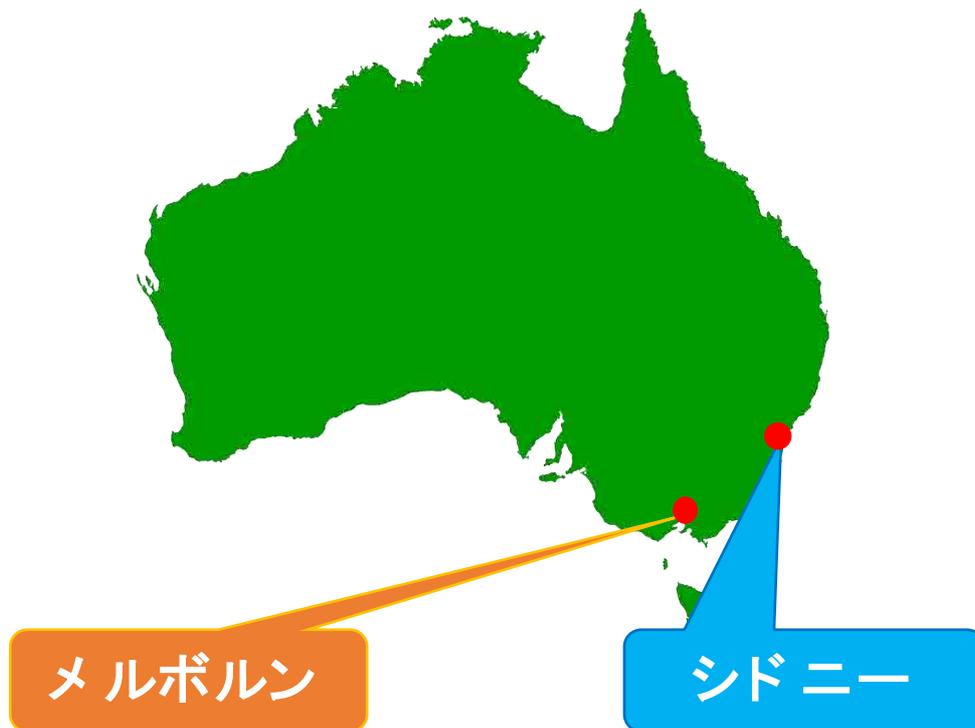


超短期海外派遣プログラム

(オーストラリア シドニー メルボルン)

報告書

2018年4月





The University of Melbourne



Opera House

目次

1. 本海外派遣プログラムの目的.....	3
2. 参加学生の紹介と研修日程.....	4
2-1. 参加学生の紹介.....	4
2-2. 派遣プログラム日程.....	6
3. シドニー、メルボルンの概要.....	8
3-1. シドニーの概要.....	8
3-1-1. シドニーの基本情報.....	8
3-1-2. シドニーの経済.....	8
3-1-3. シドニーの気候.....	8
3-1-4. シドニーの交通.....	8
3-1-5. シドニーの歴史.....	8

3-1-6. シドニーと日本の関係.....	9
3-2. メルボルンの概要.....	9
3-2-1. 地理・歴史.....	9
3-2-2. 社会・経済・文化的特徴.....	10
4. 訪問先の紹介.....	11
4-1. ニューサウスウェールズ大学について.....	11
4-2. メルボルン大学について.....	13
4-2-1. キャンパスの概要.....	13
4-2-2. 講義の概要.....	14
4-2-2-1. Biomedical, Chemical & Biomolecular Materials Engineering コース.....	14
4-2-2-2. Mechanical Engineering コース.....	19
4-2-2-2. Computer (Information Science) コース.....	19
4-2-2-4. その他の授業.....	23
4-2-3. 日本語クラブ参加概要.....	26
4-2-3-1. 参加概要.....	26
4-2-3-2. 日本語クラブ参加の感想.....	27
4-2-4. 各種見学.....	31
4-2-4-1. ラボツアーへの参加.....	31
4-2-4-2. 各自の見学.....	36
4-2-5. 学生交流.....	40
5. その他.....	44
5-1. 食事.....	44
5-1-1. シドニーでの食事.....	44
5-1-2. メルボルンでの食事.....	45
5-2. 街の様子.....	47
5-2-1. シドニー.....	47
5-2-2. メルボルン.....	49
5-3. 観光.....	51
5-3-1. シドニー観光.....	51
5-3-1-1. Bondi Beach.....	51
5-3-1-2. オーストラリア博物館.....	52

5-3-1-3. セントメリー大聖堂.....	53
5-3-1-4. オペラハウス.....	54
5-3-2. メルボルン観光.....	55
5-3-2-1. フィリップ島.....	55
5-3-2-2. 州立図書館.....	56
5-3-2-3. メルボルン動物園.....	57
5-3-2-4. クイーンビクトリア・マーケット.....	58
5-4. 交通規則.....	58
6. 所感.....	60

1.本海外派遣プログラムの目的

本プログラムは、「グローバル理工人育成コース」として開設されている4つのプログラムのうち、4)実践型海外派遣プログラムの一環として実施された。東工大において、「グローバル理工人」とは、「優れた英語力」を持つだけでなく、「高い専門性」、「探究心とチャレンジ精神」、「異なる文化を理解しながら課題解決に向けてリーダーシップを発揮できる能力」、「異なる文化や専門性を持つ人々と協働できる能力」を持つ人材を指す。このような人材を育成するために、本コースでは以下の4つのプログラムを実施しており、この海外派遣プログラムはその集大成として位置付けられている。

4つのプログラムの詳細は以下の通りである。

1)国際意識醸成プログラム：

国際的な視点から多面的に考えられる能力、グローバルな活躍への意欲を養う。

2)英語力・コミュニケーション力強化プログラム：

海外の大学等で勉強するのに必要な英語力・コミュニケーション力を養う。

3)科学技術を用いた国際協力実践プログラム：

国や文化の違いを越えて協働できる能力や複合的な課題について、制約条件を考慮しつつ本質を見極めて解決策を提示できる能力を養う。

4)実践型海外派遣プログラム：

自らの専門性を基礎として海外での危機管理も含めて主体的に行動できる能力を養う。

「実践型海外派遣プログラム」を通して、グローバル理工人育成コース所属学生が現在まで育成された能力を活用し、自身の今後の研究やキャリア形成の参考となるような経験を積むことが本海外派遣の目的である。

2.参加学生の紹介と研修日程

2-1.参加学生及び引率教職員の紹介



図2-1.ビクトリア州立図書館前にて



図2-2. 吉川先生 (左)、江頭先生 (右)

吉川 史郎 物質理工学院 応用化学系 准教授

江頭 竜一 環境・社会理工学院 融合理工学系 准教授

2-2.派遣プログラム日程

日付	時間	行動内容	滞在先
3/1(木)	14:55 頃 21:40 頃 23:15 頃	成田発 シンガポール着 シンガポール発	機内泊
3/2(金)	10:15 頃 13:30~ 15:30~ 17:00~	シドニー着 ニューサウスウェールズ大学訪問 大学内キャンパスツアー シドニー市周辺(Bondi Beach など)見学 各自買い物	シドニー Travelodge Hotel Sydney 泊
3/3(土)	9:00~	シドニー市内見学 (Australia Museum, St Mary's Cathedral, Opera House など)	シドニー Travelodge Hotel Sydney 泊
3/4(日)	8:00 頃 9:35 頃 11:30 13:00~22:00	シドニー発 メルボルン着 メルボルンセントラルにて昼食 フィリップ島ツアー	メルボルン Mercure Hotel Welcome Melbourne 泊
3/5(月)	10:00~12:00 午後 14:00~15:00 午後	Welcome and Campus Tour 各自授業 Thermodynamics Lab Tour 各自授業	メルボルン Mercure Hotel Welcome Melbourne 泊
3/6(火)	午前 11:00~11:30 12:00~14:15 午後	各自授業 Hydraulics Lab Tour Japanese Conversation Club 参加 各自授業	メルボルン Mercure Hotel Welcome Melbourne 泊
3/7(水)	午前 10:30~11:00 11:00~12:00 午後 18:00~ 20:00~	各自授業 Aerodynamics Lab Tour NIMS Lab Tour 各自授業 全員でパブで食事 ビクトリア州立図書館訪問	メルボルン Mercure Hotel Welcome Melbourne 泊

3/8(木)	午前 10:00~11:00 午後 13:50~15:00 午後	各自授業 Teaching Lab Tour 各自授業 Tokyo Tech Promotion Session 各自授業	メルボルン Mercure Hotel Welcome Melbourne 泊
3/9(金)	全日	各自授業 メルボルン市内自由散策	メルボルン Mercure Hotel Welcome Melbourne 泊
3/10(土)	9:00~ 13:00~ 20:30~	Melbourne Zoo 見学 全員で Queen Victoria Market で昼食 各自市内散策 空港へ移動	機内泊
3/11(日)	1:05 頃 5:45 頃 8:05 頃 15:35 頃	メルボルン発 シンガポール着 シンガポール発 羽田着	各自

3.シドニー、メルボルンの概要

3-1.シドニーの概要

3-1-1.シドニーの基本情報

シドニーはオーストラリア南東部にあり、ニューサウスウェールズ州の州都である。人口はオーストラリア最大で、2016年には500万人を超え、2050年までには800万人を超えられている。人口が多いものの、面積も12367km²と広大で人口密度は東京よりも低い。

3-1-2.シドニーの経済

シドニーは金融、商工業、交通の街として有名である。オーストラリアは牛肉や羊毛の輸出が世界最大で、大半はシドニー港から輸出されている。また、証券、金融機関の本社の多くもシドニーに存在している。

3-1-3.シドニーの気候

南半球に位置するため季節は日本と真逆で、私達が派遣された3月は夏と秋の変わり目であった。1日の中での気温の変化が激しく、最高気温、最低気温の差は10℃ほどあるため夏でも防寒着が必要である。また、日本よりも紫外線がかなり強いのでサングラス、帽子、日焼け止めなどの日焼け対策は必須である。

シドニーは年間340日以上晴天で、降水量も1ヶ月で100mm以下とオーストラリアの中でも過ごしやすい。また、オーストラリアの平均的な気温と比べるとシドニーは年間を通じて9℃程低い。

3-1-4.シドニーの交通

シドニーの主な交通手段としては電車、バス、フェリーなどが挙げられる。料金の支払いにはOpalカードというものが導入されていて、どの公共交通機関でも利用することができる。

3-1-5.シドニーの歴史

1770年にジェームズ・クックがこの地を訪れた。1788年にフィリップ総督が上陸しこの地をイギリスの植民地とし、クックが彼の後援者であったシドニー卿にちなんで「シドニー」と名付けた。イギリスが当時探していた、罪人の流刑地としてシドニーは利用されるようになっていった。オーストラリアは1868年まで流刑地として利用された。1800年代前

半には町の金融機関、交通なども整備されていき、自治体が完成した。1850年にはニューサウスウェールズで金が発見され、金を目当てに世界各地から移民が相次ぎ、人口も増大した。この時の移民の影響でオーストラリアは多文化国家となっている。

このようにオーストラリアの歴史はシドニーから始まった。

3-1-6.シドニーと日本の関係

日本からは、成田、羽田、関西とシドニー(キングスフォード・スミス空港)までの直行便が出ていて、フライトは9時間30分ほどである。また、アジアの都市を経由する方法もある。

日本とシドニーの時差は通常+1時間であるが、サマータイムが適用される期間内では+2時間となる。

日本の名古屋市と姉妹都市の関係にあり、シドニーからは名古屋にコアラやシリウス号の礎が送られている。

3-2.メルボルンの概要

3-2-1.地理・歴史

メルボルンはオーストラリアのビクトリア州にある州都であり、州のビジネス、行政、文化、そしてレクリエーションの中心地でもある。メルボルン全体の面積は9992.5km²で、人口は約450万人である。都市部はそのうち37.7km²をカバーしており、住民数は2016年時点で148,000人を超えている。

メルボルンには日本と同じく春夏秋冬があり、夏は温暖に、春と秋には穏やかに、そして冬には涼しくなる気候である。一方で天気は変わりやすい傾向にあるため、外出の際には雨具や上着を準備することが望ましい。私たちが滞在したのは3月のはじめだったが、昼は30度を超えるにもかかわらず夜は冷え込むということがしばしばあった(幸い、雨には一度も降られなかった)。

メルボルンにヨーロッパからの移民が入り始めたのは1830年代頃からであり、先住民族クリン(Kulin)に替わって人口が増加し始めた。その後の1850年代には、ビクトリア州で金が発見されたことによりゴールドラッシュが起こり、世界各地から運を試すために人々が殺到した。この頃にかかなりの数の中国人が流入したと言われている。第二次世界大戦後には、ヨーロッパから難民を受け入れた影響もあり、1976年には、市の人口の20%が英語以外の言語を話していた。1970年代以降には、ベトナムとカンボジアからの移住があった。以上の4つの移民の波を通じて、現在のメルボルンに至る。

3-2-2.社会・経済・文化的特徴

メルボルンは、世界的にも最も調和のとれた、文化的に多様な地域の一つであるという特徴がある。人種は世界各地の人々から構成されている。ビクトリア州の先住民族からヨーロッパ、アジア、アフリカ諸国からの移住者まで、約 140 の文化が混ざり合っている。先述の通り、いくつかの国の人々は、歴史的に早い段階でメルボルンに移住し、都市拡大におけるアイデンティティーに大きく貢献した。私たちが滞在したホテルの周辺は、ヨーロッパ風の建物からチャイナタウンまで、あらゆる町並みが混在しており、実際に多様な文化の入り交じる場所であることを実感できた。英誌エコノミストの調査部門エコノミスト・インテリジェンス・ユニット (E I U) による「世界で最も住みやすい都市」ランキングでは、2017 年の時点で 7 年連続首位に輝いており、居心地の良さも抜群である。

メルボルンの都市には 15 の地区が存在し、様々な民間企業や政府機関、スポーツ施設、公園などが所在している。ビクトリア州立図書館をはじめとした歴史的な建造物も数多く保存されているので、見学することをおすすめしたい。市内とその近郊では、トラムの路線がかなり細かく網羅されているので、各所を巡る際には有効活用すると良いだろう。特に、市内中心部内は 2015 年から無料になっているため、ますます利用しやすくなっている。マイキ(Myki)と呼ばれるリチャージ式カードを使って料金の支払いができる仕組みである。



図 3-2-1.街中を走るトラム

大学は、メルボルン大学やモナシュ大学、ビクトリア大学、RMIT 大学など、様々なキャンパスがある。特に、私たちが実際に講義に出席させていただいたメルボルン大学は、世界の大学評価でも例年トップランクに入る名門校であり、数多くの留学生を抱えている。

【参考文献】

メルボルン市公式サイト - <http://www.melbourne.vic.gov.au/Pages/home.aspx>

Australia Now! - <http://australia-now.info/>

メルボルン大学 - <https://www.unimelb.edu.au/>

4.訪問先の紹介

4-1.ニューサウスウェールズ大学について

ニューサウスウェールズ大学はニューサウスウェールズ州を本拠地とする、1949年に州・連邦両政府によって創設された国公立大学である。産業革命・第二次世界大戦を通して科学技術分野の高等教育の必要性が高まったため、土木工学、電気工学、機械工学を中心とする”ニューサウスウェールズ工科大学”として設立された。工学分野だけでなく、学生の幅広い教養のために人文学・商学などの講義も行われていた。1958年に現在のニューサウスウェールズ大学に改名され、1960年には人文学部と医学部、1971年には法学部が新設された。現在ではオーストラリア内でも常に5本の指に入る総合大学となっている。UNSWの主な学部は人文学部、芸術学部、建築環境学部、商学部、法学部、薬学部、工学部、医学部の8つである。在学中は各学部のカリキュラムに基づいた履修にくわえ、自分の興味のある分野の講義も受講することができる。

今回の派遣で私たちが訪問したのは、約4万人が学ぶニューサウスウェールズ大学のメインキャンパスであるケンジントンキャンパスであった。シドニーの中心部から南東約7kmに位置し、市内やビーチに気軽に足を伸ばせる素晴らしい立地が魅力の一つとなっている。学内には芝生やカフェテリアが多く、近代的で開放的なキャンパスであった。学生たちはこのような場所を有効活用して、友人と語りあったり、課題を進めたり、ディスカッションを行っていた。キャンパス見学では、授業を通じた学生間のディスカッションが日本の大学に比べて盛んであると感じた。

ニューサウスウェールズ大学には学部生が約3万人、大学院生が約2万人在籍しており、学部生・大学院生合わせて1万人ほどの東工大と比べるとかなり大規模である。また、留学生の受け入れや海外大学との合同プログラムを積極的に行っていることもあり、学生の約20%は留学生である。実際にキャンパス内を歩いても、英語以外の言語を耳にすることが珍しくなく、日本人の私たちが集団の中で浮くこともなかった。このように留学生の割合が多いため、国籍を超えたコミュニティが築かれており、皆分け隔てなく和気藹々とした雰囲気であった。

学生に対する支援も手厚い。学内に寮や食堂だけでなく、スーパーや衣料品店がいくつか存在しており、家が大学の近くではない学生にとってとても住みやすい環境となっている。また、英語に不慣れな留学生のための英語の授業や奨学金、支援金など、支援体制が整っている。オーストラリアの大学は学生が「この大学に通いたい」「この大学ならやっていけそうだ」と思えるような環境が出来上がっており、日本の大学との差を感じた。



図 4-1.開放的なキャンパス

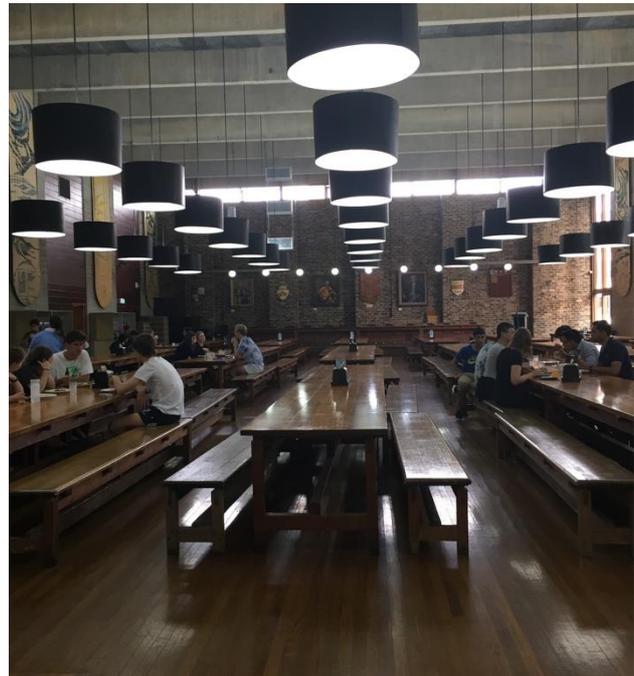


図 4-2.学生寮の食堂

4-2.メルボルン大学について

4-2-1.キャンパスの概要

今回はメルボルン中心部に近い Parkville キャンパスを訪問した。トラムの無料区間からは少し離れた場所にあるため、多くの学生は徒歩で通学している。ショッピングセンターや飲食店が多く立地する場所からは離れており、周囲には公園などが多く比較的落ち着いた雰囲気だった。広大なキャンパスの内部には多くの植物が植えられており、いくつものカフェが立地している。日中には芝生やカフェでリラックスしている学生たちが多くみられ、活気に満ちていた。また、特徴的であったのが多種多様な建造物だ。芸術系の講義が行われる建物などは近代的で意匠が凝らされている一方、Collaege と呼ばれる学生寮はかなり昔に建てられたものである。長い歴史を持つ Parkville キャンパスならではの特徴である。キャンパスや建物の構造は非常に複雑であったが、案内板や地図アプリなどが充実していて、比較的迷うことなく目的の講義室へたどり着くことが出来た。



図 4-2-1.近代的な構造の建物（左）、歴史のある College（右）

留学生の多さもメルボルン大学の大きな特徴の一つだ。キャンパスでは様々な国籍の学生たちが生活しており、特に中国人をはじめとしたアジア系の学生が多く、授業によっては講義室の半分ほどをアジア系の学生が占めていたように思える。日本人の学生と偶然会い、話をすることもあった。また、訪問させていただいた研究室の中には、半分以上が中国出身の学生だということもあった。このような要因からか、「Union House」と呼ばれるカフェテリアにはインドカレー、中華料理、日本食など多様な国籍の料理が用意されていた。キャンパスの中で最も大きなこのカフェテリアは昼食の時間には非常に多くの学生で賑わっており、座席数が多いにも関わらず席が確保できない日もあった。

以上のように、メルボルン大学は美しいキャンパスに多様な学生たちが通う、活気あふれる大学だった。

4-2-2. 講義の概要

メルボルン滞在中、私たちはメルボルン大学の学生とともに通常の授業を受講した。具体的には、自分たちの専門に合わせて、“Biomedical, Chemical & Biomolecular Materials Engineering”, “Mechanical Engineering”, “Computer (Information Science)”の3コースに分かれて、専門の授業を受講した。その他にも、自分たちが興味のある教養科目の授業にも受講した。ここでは、私たちが受講した授業を科目コードによって分類し、その内容や受講した感想について述べる。

4-2-2-1. Biomedical, Chemical & Biomolecular Materials Engineering コース

CHEN : Chemical Engineering

Reactor Engineering (CHEN30001)

東京工業大学で反応工学の授業を受けたが、それと内容が似ていたので少し理解することができた。やはり、使う文字記号は世界共通なので細かい説明が聞き取れなくても何を説明したいのかはだいたい理解することができる。スライドをノートに写すのが追いつかず、大変だった。現地の大学生はスライドをどこからか手に入れて手元に用意していた。そこに追加でメモを取る形で講義を受けていた。国は違っても学ぶことは同じだと身をもって理解することができた。

Carbon Capture and Storage (CHEN90027)

化学工学を専攻する修士学生向けの講義であった。内容は、化学プラントにおいて窒素や酸素をどうリサイクルしながら、工業的なプロセスを成り立たせるかといった内容であった。プロセスには複数の種類があり、それぞれ化学工学専用のフローチャートで表されていた。講義はプレゼンテーションスライドを用いながら行われ、学生は手元に用意したスライドの資料を見ながら受講していた。この授業の内容は、東工大の二、三年生の化学工学に関する講義で習いそうな内容であったため、修士課程学生向きといっても難易度はそこまで高くないのではないかと思った。

CHEM : Chemistry

Chemistry for Biomedicine (CHEM10006)

この授業では、化合物を物理的な視点からとらえ、薬を理解することをコンセプトにしている。1年生の授業ということもあって、エントロピーやルシャトリエの法則などの基本的事項を扱っていた。また、2年生の授業とは異なり、学生が社交的で、授業の雰囲気はかなり良いものとなっていた。授業の進め方としては、説明と演習を繰り返していたため、実践力はかなりつくと感じた。

Environmental Chemistry (CHEM20011)

学部2年生向けの講義であり、内容は本格的な学生実験を始めるにあたって知ることが必要な理論についてであった。具体的には、有効数字の取り扱いや、コンタミネーションの種類、滴定における等量点と終点の違いなど、高校生の化学で教わる内容も豊富であった。個人的には、データの処理に関連して、Q検定やt検定など統計学的内容も学べたことが非常に興味深かった。階段状の講義室において、先生がプレゼンテーションスライドを用いながら、内容の説明を行っていた。自由に質問して良い雰囲気があり、講義中によく学生が質問している姿が見受けられた。時々、先生が教室全体に問いかけをすると誰かしらが数秒後にレスポンスを返す点は、日本とは違い外国らしいと感じた。

Chemistry : Reactions and Synthesis (CHEM20018)

この授業では、有機化合物の反応と合成法を学ぶ。今回、私はこの授業に2度参加した。1回目は、カルボニル化合物のハロゲン化、アルキル化、2回目は、カルボニル化合物のアルドール縮合に関する授業であった。2年生の授業ということで、今年度から3年生になる自分としては、既に学習した反応が多く登場したため、理解しやすかった。その一方で、東工大で扱わなかった複雑な反応を、教授が反応機構まで細かく説明している場面があり、授業のレベルの高さを感じた。また、反応の実用例を合間に盛り込んでいたため、退屈することなく授業を受けることができた。授業形式としては、教授が手元に書いたメモをスクリーンに映すという、斬新な形式であった。

BMEN : Biomechanical Engineering

Biomechanical Physics and Computation (BMEN20001)

人体についての講義で、関節をその可動域によって蝶番関節などに区別していた。その関節の種類を考慮した上で、「人がものを持ち上げる時に肩の関節にかかる力はいくらであるか」などを物理のモーメントの考え方を利用して求めている。

生命系の生徒のための授業であるがとても物理色が強く、東工大だと生命理工学系ではなくシステム制御系や機械系で扱いそうな内容だった。

Introduction to Biomechanics (BMEN30005)

バイオメカニクスの導入ということだったが、実際は完全に物理の授業であった。内容は一般的な現象を題材として、それらを物理的観点から考えていこうというものだったが、授業の進行がたいへん早く、講師が次々と式を解いて進めてしまうので、現地学生もついていくのがやっとなという感じだった。物理に特徴的な仮定を用いて、ベクトルの変換やモーメントの計算、外積・微分を行うなど、計算方法は東工大の物理と大きな差はなく、ある程度理解はできた。題材が生体に関するものだけに、仮定が複雑で難しかったが、学生の興味を促すにはこのような題材を選ぶべきだと感じた。

Soft Matter Engineering (BMEN90012)

ある種のイオンが溶液中に溶けている状態を仮定し、そのイオンについてポアソン・ボルツマン方程式が成り立つことを学んだ。当初、高分子ゲルに加わる応力などについて扱う授業を期待していたが、内容は全く異なっており、物理化学、溶液化学に近いものであった。修士課程学生向けの授業であることから、授業中は全く内容を理解できなかったが、数式中の文字の意味を示されると、とある項が総電荷の分布を表していることなどに気がついた。この点で、1年生で既習済みの電磁気学基礎で学んだことが生かされており、海外の修士課程学生向けの生命化学の講義においても基礎教養の電磁気学の知識は必要不可欠であると感じた。

Medical Imaging (BMEN90021)

院生向けの授業であったが、学部生にとってこの授業の内容を理解するのは困難であるように思われた。画像認識技術の紹介についての内容を予想していたが、実際はその根本原理について深く踏み込み、matlab を当然のように使ってシミュレーションまで行っていた

ので、さすがについていけなかった。印象的だったのは医療の分野でもフーリエ変換やシミュレーションなど純粋数学が用いられるところがあるという事実である。それらの分野について毛嫌いしていた節があるので、数学の応用場面をイメージすることができたのは大きい。

FOOD

Food Chemistry, Biology and Nutrition (FOOD20003)

この授業では、食品に含まれている物質の体内でのはたらきについて学ぶことができる。私の出席した授業では、物質の吸収に関する講義であった。具体的には、物質の細胞膜の通過と ATP の関係や柔毛での物質の吸収の仕方を細胞レベルで学ぶというものである。分子生物学に近かったが、有機化学や生化学も絡めた話が数々持ち上がっていたため、興味の広がる授業であったと言える。授業内で使用される英語には、多数の専門用語が登場したため、理解するのに苦労したが、全体的な要旨は捉えることができた。ちなみに講義は、映画館並みに大きいホールで行われており、後ろの方の席に座っている人は、到底スライドの文字を読みそうにはなかった。

Food Engineering (FOOD90029)

メルボルン大学には FOOD と呼ばれる分野の授業があり、院生向けではあったが、栄養学を化学的に取り扱った内容で理解できる範囲であった。まずタンパク質、糖質、脂質の 3 大栄養素に対してその成分と特徴を化学的に示した後、食品加工の技術開発に必要なものと他の栄養素の特徴について触れていた。特に新しい内容はなかったが、食品に対する意識の高さを感じ取ることができた。

GENE

Evolutionary Genetics and Genomics (GENE30001)

この授業では、生物の進化を分子的な視点から考えることをモットーとしている。今回受講した講義では、分子時計について授業であった。具体的には、生物の進化の速度を一定と見なした時に限り、塩基の変異の数から、系統樹の分岐の時期を推測できる、というものである。3 年生の授業であったため、かなり不安であったものの、教授の英語が聞き取りやすく、なんとか理解することができた。また、Lecture であるにも関わらず、生徒が積極的に

教授に質問を投げかけており、Discussion に近い授業であったため、かなり新鮮であった。

POPH

Genetics, Health and Society (POPH20001)

一週間につき 2 回の講義と 1 回のチュートリアルで構成されている。3 回目の遺伝とヒトの発達についての講義に参加した。

まず、ヒトの生殖の仕組みについて、減数分裂の仕組みも含めて説明された。そのあと、精子の構造と動きを YouTube の動画を用いながら説明された。後半では、不妊の原因と解決策を、男性側と女性側に分けて紹介していた。

講義はスライドを使用して行われた。学生はあらかじめスライドを PC にダウンロードしていた。板書を Word でとる学生が多く、どの学生もタイピングが速かった。出席をとらない授業であるものの、シアターはほぼ満席であった。たまに授業中の私語が見受けられた。

MIIM

Microbiology in Agriculture (MIIM20004)

一週間につき 3 回の講義と 4 回の演習と 1 回のワークショップで構成されている。4 回目の細菌の遺伝学についての講義に参加した。

まず、細菌は系統樹の頂点に位置することが説明された。系統樹が分岐して生物が進化するのには、遺伝子の変異が起こるためであることが説明された。そのあと、遺伝子変異が起こる原因をいくつか紹介していた。

機器のトラブルでスライドが映し出されなかったため、聞き取ることでしか情報を得られず、苦勞した。学生はスライドを事前にダウンロードしているのが前提のようで、先生が説明にホワイトボードを使うことはなかった。

BCMB : Biochemistry and Molecular Biology

Biochemistry and Molecular Biology (BCMB20002)

一週間につき 3 回の講義と 1 回のチュートリアルで構成されている。6 回目のタンパク質の構造についての講義に参加した。

まず、タンパク質の構造を知る方法が紹介された。次に、PDB (Protein Data Bank) の使い方と各項目の見方が説明された。そして、 α -ヘリックスと β -シートは異なる層にあるなど、タンパク質の構造のルールが示された。

スライドにページ数が書かれていたので、教科書が指定されているようだが、講義に持ってきている人はいなかった。

Biochemistry in agricultural Systems (BCMB20006)

一週間につき 3 回の講義と 1 回の演習で構成されている。4 回目と 6 回目の講義に参加した。

4 回目は、ペプチドとタンパク質についてだった。タンパク質の一次構造・二次構造・贅辞構造・四次構造の各構造をつくる化学結合について説明された。

6 回目は、酵素反応論についてだった。まず、ミカエリス・メンテン式の意味が説明された。そのあと、反応曲線を用いながら、競争的阻害と非競争的阻害の違いを説明された。

講義は、東工大のレクチャーシアターのような部屋で行われた。東工大では 90 分授業のため、50 分授業は短く感じられた。学生は、仲の良い友達同士が 3 人ぐらい集まって聞いていることもあるが、一人で聞いている人もかなり多かった。移動時間が 10 分間しかないためか、遅れてくる人もおり、授業終了後の片づけは速かった。紙のノートを使っている人は、B5 ではなく A4 を使っており、2 穴ルーズリーフのようなものだった。

BIOM : Biomedicine

Molecular and Cellular Biomedicine (BIOM20001)

一週間につき 6 回の講義と 2 回の演習と 1 回のワークショップで構成されている。10 回目の膜タンパク質と酵素についての講義に参加した。

前半は膜タンパク質についてで、GLUT1 と P 型 ATP アーゼの仕組みが説明された。後半では酵素が化学反応を促進する仕組みと、酵素の重要性が説明された。

別のシアターとの遠隔授業だったため、非常に空いており、静かだった。授業後に先生に質問している人がいた。

BTCH : Biotechnology

Biotechnology in practice (BTCH30003)

生物工学の応用とバイオ技術の変遷についての講義を予想していたが、実際には大学で

開発した技術をいかにして一般化し、その知的な財産をいかにして守るかという Transfer of Technology (TOT) を取り扱った講義だった。学部3年生を対象とした講義であったが、学生にとっても一般的な内容ではなく、それらを英語で理解することはかなり難しく感じられた。ただ企業に入る前から知的財産とそれを守る大学の制度について講義が行われるという事実から、研究者の価値を高く評価し、保護する仕組みが備わっているということに日本との違いを感じることができた。講義の方法も大学の講師ではなく、外部の企業から人を呼んで講義を行っているようで、メルボルン大学発祥の技術や動画を交えながら飽きない授業構成となっていて、内容は難しかったが、興味深い内容であったと思う。

4-2-2-2.Mecanical Engineering コース

ENGR : Engineering

Engineering Systems Design 1 (ENGR10004)

学部1年生向けの授業で巨大なホールがいっぱいになるくらい多くの生徒がこの講義を受けていた。内容は理系学生にとっては必須の考え方であるモデルと抽象化の概念についてであった。現実世界で起こる現象を理解するためにはモデルが必要で、物理法則または経験則に基づくモデルを、問題解決のためのツールを利用して、ある現象に適用・実行し、問題の解決を図るという流れを説明し、さらにモデルを適用するうえで実際の現象を抽象化する方法を、例をもとに紹介していた。内容は新しいものではなかったが、大変興味深い内容であった。講師によるかもしれないが、この講義では特にエンターテインメント性が高く、ジョークを交えることも多々あって、講義というよりプレゼンを聞いているような感覚だった。このような教養とも専門とも違う理系学生が持つべき考え方を教える講義を日本ではあまり見ないので、このような学習の目的を示す講義の必要性を強く感じた。

Engineering Mechanics (ENGR20004)

物理のモーメントの考え方を一般的な機械、建築物などに適応して考えるための授業で、複雑な構造をした橋や、クレーン車の特定の一点にかかる力を求めた。内容は難しくなかったが、とても具体的、実践的で面白い授業だった。

複雑な図などが多用されているため、授業にノートを一冊だけ持って行った私はとてもメモするのが大変だったが、生徒のほとんどはパソコンで授業を受けており、とても効率よく授業を受けていた。

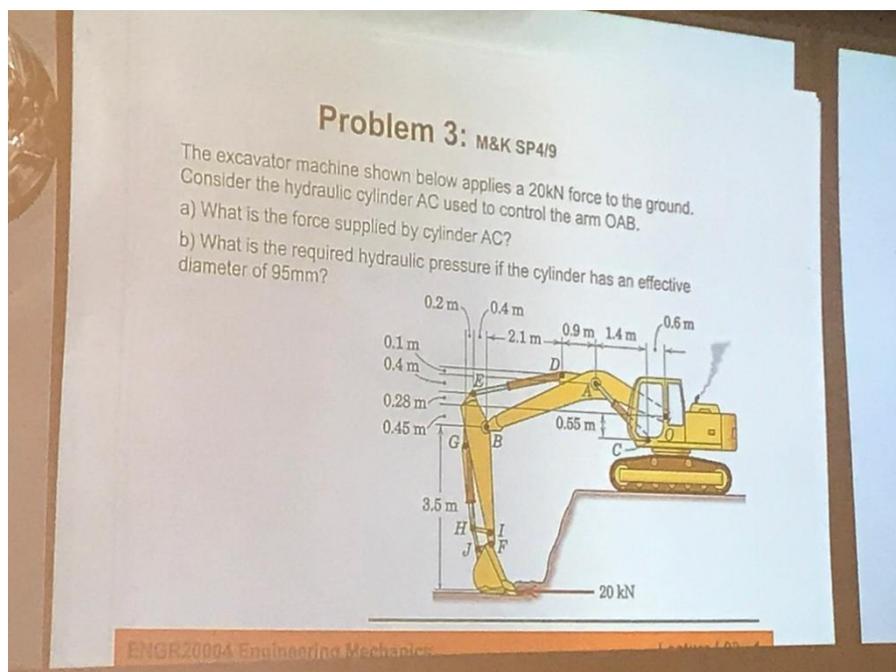


図 4-2-2-1.実際の講義で使われた資料

Engineering Mathematics (ENGR20029)

二年生向けの数学の授業である。積分における座標変換の方法について講義が行われた。東工大では一年生の前期に習った内容であり、他の理工系基礎科目の講義でも感じたことだが、多くの理工系の授業については東工大の方が進みが早い。しかし、計算例や記号の意味、それぞれの座標変換が有用である場合についてなどが丁寧に解説されており、非常に分かりやすく良い復習になった。

MCEN : Mechanical Engineering

Thermodynamics and Fluid Mechanics (MCEN30018)

この授業は熱力学と流体力学の基本的な理解を深めることを目的としたものである。今回はその中でも温度変化による水の体積変化のグラフについてと、その値の補間方法を扱った。一般に計算で利用される表の値は連続的なものではないため、必要に応じて適当な関数を用いて値を補間する必要がある。この授業で例として取り上げられたのは最も簡単な線形補間であったため、理解することは容易であった。

Materials (MCEN90014)

この授業は大学院生向けの機械系の授業であり、主に材料の種類や、相平衡・金属合金・セラミックス・複合材料などの特性について理解を深める講義であった。私が今回受けた講義では、金属合金の組成と相変化の関係について取り扱っていた。講義スライドを追うことでなんとか内容を理解したが、現地の学生も同様であったようだ。この講義の先生が質問タイムを何度か設けてくださったこともあるのか、学生は皆積極的に質問を投げかけ、お互いに納得がゆくまで討論を交わしていた。東工大ではこのような光景はなかなか見ることができないため、とても新鮮に感じた。また、大学院の授業ということもあり、専門性が高くなったことも理由の一つであると考えられるが、週一回の講義で多くのことを扱うことはできないために、その分事象一つ一つについて深く掘り下げているように思えた。

4-2-2-3.Computer(Information Science)コース

COMP : Computer

Foundations of Computing (COMP10001)

Media Computation と同様に、プログラミングの基礎を学ぶための初学者向けの講義であった。私が受講した回は、python のインタプリタをモニターに映し出して四則演算や簡単な代入操作を実際にやってみせる、といった内容であった。

この授業で最も印象に残ったのは、変数への値の代入操作について説明するために、ビジュアル的に挙動を解説していた点である。具体的には、 $a = 1; b = 2; a = a + 1; a = a + b;$ というプログラムにおける変数の値変化を説明するために、まず変数 a, b 役を学生の中から2人選ぶ。次に、この2人を登壇させて、1と2が書かれたカードの受け渡しを実際に前でやってみせる、といった具合である。プログラミング初学者は、代入演算子「=」を数学的な等価の意味と混同しやすい(私も最初はそうだった)ため、それを払拭するための工夫がなされていて素晴らしいと感じた。

Media Computation (COMP10003)

プログラミング言語を利用して基本的なプログラムを設計する方法について学べる、プログラミング初学者向けの講義であった。まずはプログラミングを本で勉強する方法に関する説明と、おすすめの本の紹介から始まった。次に、変数や型などといった、基本的な概念の説明をして1回目の講義は終了した。

授業中の演習で、あるプログラム中で利用する変数の名前として適切なものを考えるために、近くにいる学生と相談する時間が設けられた。自分が話した相手は中国から来た学生だったが、英語が非常に堪能で驚かされた。私も、英語で的確に意見が述べられるようになる必要があると痛感した。

Design of Algorithms (COMP20007)

効率の良いアルゴリズムの設計や、その評価方法に関して扱う講義であった。情報系の学生にとって、効率の良いアルゴリズムでプログラムを実装することは必要不可欠であり、本講義はその初歩を学ぶためのものであったと思う。

講義の前半では、現代のコンピュータシステムのほとんどがノイマン型コンピュータであるということを知った。後半では、ノイマン型コンピュータという仮定の元で計算量 (O 記法など) を数学的に定義し、具体的にフィボナッチ数列の計算における計算量の算出などを行った。計算量が便利な概念であることを説明した上で、実際にデータセットを利用して計算時間を測定することも重要であると念押ししていた。

Artificial Intelligence (COMP30024)

特定の複雑なタスクをこなすことができる知的プログラムを作成するための手法全般について扱う講義であった。私は研究室で機械学習について学ぶ予定なので、本講義では関連する話題にいくつか触れられるかも知れないと思い、興味があった。

私が出席した回では、深さ優先探索や幅優先探索をはじめとする、グラフ等の探索を行うためのアルゴリズムについて学んだ。例えば深さ優先探索はゲーム木探索に適用でき、チェスや将棋 AI の探索アルゴリズムの基本である minimax 法や alphabeta 法にも応用できる。この分野を学習する上で抑えておきたい概念である。

Computational Genomics (COMP90016)

ゲノムデータを理解するための計算的手法に関して扱う講義であった。データを解析するための手段としてシーケンシングというものを学んだが、私の生物に関する知識が乏しく、内容も修士向けで難しかったため、詳しくは理解できなかった。

Algorithms and Complexity (COMP90038)

Design of Algorithms を修士学生用にしたような内容の講義であるという印象を受けた。まず最初に、効率的なアルゴリズムとは「短時間で解に到達し、かつメモリをあまり消費しないもの」であるという前提を教わった。その上で、計算時間を知る指標として計算量 (O

記法など) の概念を学び、実際に様々なプログラムの計算量を計算した。

INFO : Information

Web Information Technologies (INFO30005)

Web 用のアプリケーションをモデル化、設計、開発するために必要なツールやテクニックを知るための講義であった。具体的には、HTML や CSS、JavaScript、Git などの仕組みについて学んだ。

最も印象に残ったのは、Kahoot! (<https://kahoot.it/>) という 4 択早押しクイズができる Web サービスを利用して授業に関するクイズを出題し、参加型の授業を行っていた点である。生徒は自分のパソコンを通じてクイズの解答を送信することができ、正解率上位の人は加点される、といった仕組みであった。このように、ゲーム感覚で楽しく受講できるよう工夫された講義は初めて体験したので、とても斬新だと感じた。

4-2-2-4.その他の授業

ZOOL

Australian Wildlife Biology (ZOOL20004)

オーストラリアの生態系に関する授業で珍しいと思い受けてみた。内容はヒキガエルの生態とオーストラリアに棲息するようになった経緯、またヒキガエルが生態系に及ぼす影響を述べていた。印象的であったのはその種のリスクがほかの種の生態数に直接影響するわけではないという内容である。毒をもつ種であっても、捕食者の趣向の変化等による間接的な影響があるため、生態数の変化や分布の変化を予測することは難しいらしい。自身の国の生態系について大学レベルで講義を行うのを日本ではあまり見ないので、広大な自然を有するオーストラリアならではの授業といえるかもしれない。

MAST : Mathematics and Statistics

Calculus2 (MAST10006)

微分・積分の授業だったが、内容は日本の高校で習うものだった。極限同士の四則演算のルールや、 $\log n$ 、 n^p 、 a^n 、 $n!$ の $n \rightarrow \infty$ の時のオーダーの順序などである。スライドには数字などが多く、日本の数学の授業でも英語を使った表記が多いためスライドを読むのは比較的簡単だった。生徒が活発に質問をしているのがとても印象的で、大教室のど真ん中、後方から質問が飛び交い、時には生徒同士で議論が始まってしまうこともあった。数学の授業でも先生は黒板を使わず、ノートに証明などを書きながらそれをカメラでスクリーンに映し出して説明していた。

Analysis of Biological Data (MAST20031)

学部2年生向けの授業で、内容はQ-Q plotによる正規分布か否かの評価方法と確率標本の考え方であったが、どれも統計に関する基本的な授業であった。生物学において得られるデータはビックデータになることが多く、統計的な手法を学ぶことは必須であるが、東工大ではそのような授業は少ない。メルボルン大学では統計学の授業を生物学を専攻する生徒に向けて行っていて、統計学の必要性を強く感じているのだと知った。日本ではまだまだそのような傾向は少ないので、統計をテーマとした講義をもっと増やしていくべきだと思った。

Applied Mathematical Modeling (MAST30030)

バネの動きや感染症、交通の流れ、などといったもののモデルを考えて、常微分方程式などに帰着させる、という内容の講義であった。情報系ではなく数学・統計系の講義であるが、モデリングは情報系の分野にも大いに関係があるため受講した。

本講義とは直接的に関係のない話題だが、海外には統計を学ぶための学科が実際に存在するということを知って驚いた。以前、私が所属する学科のある教授が「日本は統計分野を軽視していて、海外の大学には普通に存在する統計学科が存在しない。」とお嘆きになっていたことを思い出した。

Biological Modelling and Simulation (MAST30032)

学部3年向けの授業で生物学の内容と絡めた話を期待していたが、実際は生物学的に安定なポイントを探す方法を、ロジスティック方程式を例にとって解説していて、その中身はほとんど数学だった。ただ数学的手法は微積だったのである程度理解はできた。黒板を用いて式を書いていたが、途中から matlab を使って、複数のパターンをダイナミックに表現していて、一つ一つのパターンを考えていくよりもイメージしやすく良い方法であると感じた。

PHYC : Physics

Physics 1 (PHYC10003)

日本の大学で一年生向けに教えられている力学の講義と同じような内容だった。物理学だけでなく、学習のために必要となる数学から教えられる点も日本と似ていた。私が参加した日には、ベクトルの演算について説明していた。外積について、日本で「右手の法則」と呼ばれるもののことを「right hand rule」と呼んでおり、言葉の違いが分かって興味深かった。力学の基本的な運動について解説するときには演示実験が行われるなど、非常に丁寧な講義で分かりやすかった。

JPAN : Japanese

Variation in Japanese language (JAPN20012)

メルボルン大学の日本語上級の授業に参加した。日本語を話せる学生がほとんどで、教授は日本人だった。授業の言語も日本語で、時々英語を使う程度であった。人称についての授業であった。教科書に女、男が自分のことを何と呼ぶかをグラフにしたものが載っていて、それについての議論を行った。ほかにも 10 個以上のグラフがあり、年代により呼び方が違ったりすることが読み取れた。日本においては、なかなか他人が自分のことを何と呼ぶのか気にすることは無いが、特徴を知れてとても面白い授業だった。女性だけが使う言葉の原則があると学んだ。自己主張やわらげの原則というものだ。日本の女性は自己主張しすぎるのはよくないと感じるため、語尾を和らげるという説明であった。自分ではそういうつもりはなかったが、海外の人に説明するにはこのような原則として説明するのだな、と思った。日本語を客観的に見ることができ、面白い体験だった。

4-2-3.日本語クラブ参加概要

4-2-3-1. 参加概要

メルボルン大学には、様々なクラブがあり、日々活動に勤しんでいる。その中でも、魅力的なのが日本語クラブである。このクラブでは、主に日本語の上達を目標としており、日本語でのセッションイベントを企画したり、日本の大学との交流を行っている。オーストラリア人はもちろん、中華系、アメリカ人、さらには日本人までもが入部しており、国際交流するには最適の場所である。

今回私たちは、その日本語クラブにお邪魔して、活動に参加した。去年のようにイベント形式ではなく、Free Talk という形で活動した。ちょうど昼時ということもあり、Kit Kat やルモンドなどの日本では馴染み深いお菓子を食べながら、派遣メンバー1人につき、クラブのメンバー5, 6人と会話をした。クラブのメンバーは、相当日本語を勉強したのか、予想以上に堪能な日本語を話しており、かなり驚いたことを覚えている。そこでメンバーに、なぜ日本語を勉強しようと思ったのかを聞いてみると、日本のアニメやドラマに魅了されたから、家族に日本人がいるから、日本に住んでいたからなどの回答が返ってきた。メンバーの中には、自分より日本のドラマのことを知っており、好きこそ物の上手慣れとはまさにこのことであると実感した。また、留学中の日本の学生にも遭遇し、様々な話を聞くことができ、良い刺激となった。



図 4-2-3-1-1.日本語クラブ参加時の様子

4-2-3-2. 日本語クラブ参加の感想

・日本語クラブに参加しているメルボルン大学生はみんな積極的に私に話しかけてくれた。日本語を勉強している理由を聞くとアニメや漫画が好きだからという理由が多く、改めて日本のアニメ、漫画の人気の高さを実感したし、海外の友達を作るにはアニメ、漫画について少し知識があったほうが良いとわかった。皆日本語が上手で、会話は日本語と英語を混ぜながら行った。

交流会の中で特に仲良くなった友達とは夕ご飯に行く機会もあった。会話の内容は日本

人の友達と話す内容と大差なく、最後には別れを惜しむほど楽しい時間を過ごすことができた。

・日本語クラブの学生さんの中には本当に日本語が上手な人もいて驚いた。また、新歓期ということもあって、すべての人が日本語を上手に話せる訳ではなかったのも、日本語でよりも英語で会話を楽しんでいる印象が強かった。そのため、むしろ英語で会話する練習にはなったと思う。ただ、私の場合、会話をしているうちに内容は日本のひらがな、カタカナ、漢字について移っていったので、やはり参加者は日本そのものやその文化について、興味があるのだと感じた。配られたお菓子は日本のものであり、このクラブに参加することで日本に関して興味が湧いてくるかもしれないと感じた。

・私が日本語クラブで知り合ったある人は、「自分の伝えたいことはほかの人に伝えられるようにならないといけない」という思いで母国語以外の言語を学習していた。その話を聞いて、自分の語学の勉強に対する姿勢を見直すいいきっかけになった。

日本語クラブで私が話した人は皆日本語がとても流暢で、日本で生まれ育ったのかと思うくらいであった。それにもかかわらず、「自分の日本語はまだまだだ」と言っていて、向上心の高さが感じられた。

彼らの話を聞いていると、自分が今まで7年間もかけて勉強してきたはずの英語とは何だったのだろうかという気持ちになった。受け身の姿勢ではなく、主体的に勉強していくことが重要だと改めて実感した。

・日本語クラブでは様々な学生と会話をした。新年度の初めということもあり、学生の中には初めてクラブに参加している人も多く、あまり日本語を知らない人も居たため、主に英語で話した。学生たちとの会話の中で、メルボルン大学やオーストラリアでの生活についても聞くことができた。

私が話した中で、オーストラリア出身の学生は日本に何度も旅行に行っているようで、スノーボードをしに行った時の写真などを見せてくれた。中国出身の学生は日本の高校に通っていたそうで、非常に日本語が上手だった。メルボルンでおすすめの観光地や食べ物などについて教えてもらった。

日本の文化や芸能人などに興味を持っている学生が何人かおり、そういった人たちは日

本語が上手な人が多かった。その中の一人とは趣味が合い、後日個人的に会ってお茶をしながら会話を楽しんだ。連絡先を交換したので、今後も交流が持てそうで楽しみだ。

学生たちとの交流の中で、自分の英会話能力が足りないばかりに、思うように言いたいことを伝えられないことが多々あった。自分とは異なる文化の学生たちと話すことはとても楽しかったので、次の機会があればより満足に会話ができるよう、英会話の勉強を頑張りたい。

・現地の学生と交流したのはメルボルン大学にある「日本語クラブ」に参加した時だった。日本に興味のある学生と話をすることができた。アジア系の学生が多かったように思える。日本人も数人いた。また、日本語を話せる学生が多かったため、日本語と英語を使った会話となった。日本に来たことがある人や、日本で働いていたことがある人がいたため日本についての話をした。私が行ったことのない場所にも行っていて驚いた。おすすめの観光地などを教えてもらってその後に役立てることができた。短い時間だったが、現地の人と交流ができて貴重な体験となった。

・今回は主に、日本語クラブの参加時に交流の場を設けられた。私は、中華系3人、中東系2人、オーストラリア系1人、日本人1人と会話を楽しんだ。偶然にも、ほとんどのメンバーが日本語を話すことができず、結局英語で会話をすることになった。しかし、会話を進めていくうちに、日本が本当に好きであることを感じ取ることができた。特に、中華系のメンバーは、日本のアニメをこよなく愛しており、アニメのキャラクターをたくさん紹介してくれた。あまりのアニメ好きに、秋葉原へ行くことを強く勧めたほどである。また、中東系のメンバーは、東工大を知っており、日本での知名度の低さ故に、驚きを隠せなかった。このように、海外でも日本に興味を持っている人々がいるため、個人的には、これからは様々な人に日本の情報を発信していけたら良いと思っている。



図 4-2-3-2-1.学生交流をしている様子

・私たちが参加した日本語クラブには現地の学生がおよそ50人ほどいらしており、想像以上に賑わっているというのが第一印象であった。最初は学生たちとの会話に緊張したが、積極的に相手の方からも質問を振ってくださったので、徐々に慣れてゆき楽しく交流出来たように思う。

まず最初にお話ししたのは、中国からの学生であるテレンスさん。日本語は勉強して間もないそうだが、日本語で自己紹介が出来る程度には身につけていた。自分の名前を紙に書いてみせると、「両方の漢字とも中国にある！」と言い出し、それをきっかけに漢字トークが始まった。私は日本には音読みと訓読みの2通りの漢字の読み方があるということを説明した。他にも、中国にしかない漢字や、日本にしかない漢字の話で盛り上がった。潘さんは日本の音楽にも興味があるそうで、「日本の曲を教えてほしい」と質問されたときにはSMAPの世界に一つだけの花を紹介した。

日本とオーストラリア人のハーフである武蔵さんとの会話も印象に残っている。彼は高校時代から日本語を勉強しはじめて7年目になるらしい。とても流暢に日本語が話せる上

に、漢字もある程度書けていたため驚かされた。ざっくばらんに物事を言うタイプの方であり、彼の自分語りなどもユーモアに富んでいて大変面白かった。一方で、芯が強く軸がしっかりしている方であるという印象も受けた。特に、「私は日本人が話すように上手くは喋れないが、少なくとも自分の考えていることは伝えられる。自分の考えを伝えられないようではダメだ。」という主旨の発言（ちなみに日本語）にははっとした。この発言を受けて、果たして私は英語で適切に自分の思っていることを伝えられるだろうかと考えさせられた。

・日本に興味のある学生が多く参加していて、私が日本人であることがわかると現地の学生から積極的に質問を投げかけてくれるので、大変コミュニケーションを取りやすかった。日本語について勉強している学生が多く、ひらがなやカタカナについて教えてあげることも多々あり、日本語を話せる学生もたくさんいた。うまく英語が伝わらないときには携帯の翻訳機能を使って、なんとか伝えようとする姿も印象的で、現地のおすすめできる観光地についてたくさん聞くことができ、調べるだけではわからない現地の人の情報は大変価値のあるものを感じた。日本語クラブで知り合った学生とは昼休みにもう一度会うことができた。お互いの都合上大学内のカフェで1時間ほど話すにとどまったが、オーストラリア在住の日本人の人とも交流することができ、基本的に日本語で会話をしてくれたので、交流はしやすかった。話題も文化的というより、学生的な話が多く、むしろ気兼ねなく話すことができた。今後も機会があれば交流を続けていきたいと思う。



図 4-2-3-2-2.日本語クラブの人との写真

・日本語クラブでの学生交流では、はじめはなかなか話しかけることができず苦労したが、何人かの学生と仲良くなることができた。日本に興味がある人が集まっているためか、日本のアニメや漫画を好きな方が多く、好きな作品、お互いにおすすめする作品について語り合うことができた。ジャニーズなどのアイドルグループから日本に興味を持った人もおり、日本が幅広く知られていることを実感した。

日本語クラブのメンバーにはメルボルン大学への留学生も参加しており、オーストラリアの方だけでなく、アジア系の学生とも交流することができた。ある中国からの留学生は、英語に不自由していないように見えたが、彼女自身は学術的な場面で英語のネイティブの方との差を感じていると話していた。「日本人は英語が苦手」といわれていることもあり、逆に他の国の人は英語に苦労していないようなイメージを勝手に持っていたが、皆苦労し、努力していることがわかった。

また、日本語クラブの学生と一緒に夕食に行き、オーストラリアならではの授業後の過ごし方を体験した。オーストラリアには道沿いに喫茶店の椅子が並んでおり、夕食後にそこに座って、会話を楽しんだ。メルボルンでは街の様々な場所で路上パフォーマンスが行われており、その演奏を聴きながら日本とは違う、ゆったりとした時間を過ごすことができた。

4-2-4.各種見学

4-2-4-1. ラボツアーへの参加

1. Welcome and campus tour

大学の概要の説明

初めに、メルボルン大学の歴史や、学部の構成について紹介していただいた。また、学部教育についての説明を受けた。そして、一週間メルボルン大学で過ごすうえで、困ったときの問い合わせ先を教えていただいた。この時、始めてキャンパスマップをもらったのだが、マップを見た瞬間、東工大よりも広いと感じた。その後は、実際に Parkville キャンパス内のツアーをしてくださった。

キャンパスツアー

ベスさんにメルボルン大学を案内してもらった。このツアーを通して、図書館、生協、学食、トレーニングセンター、プール、グラウンドなどの各施設の場所を教えていただいた。メルボルン大学の敷地はとにかく広大で、一周するのに一時間ほどかかった。東工大の本館のような大きさの建物が何棟も建っていた。それらの建物の各地に生徒が座ることのできるスペースや軽食をとることのできる設備が整っていて、生徒が快適に学校で過ごすことができそうであった。特に印象に残ったのは学生寮で、映画に出てくるようなとても古い建物であった。



図 4-2-4-1-1.学生寮

2.Thermodynamics Lab Tour

熱力学に関連してエンジンに関する工学的な内容を研究している研究室を見学した。ここでは、研究用のエンジンを見学した。燃料は、エタノールなどのアルコールであり、これら燃料に用いる物質を変えることで、燃料噴射口から出る燃料の挙動がどう変わり、それが燃焼の効率にどう影響しているのかを研究していた。また、高圧下と低圧下での比較映像を見せていただいた。案内してくださった教授の英語がだんだんと聞き取りやすくなっていったのが、印象的であった。

3.Hydraulics Lab Tour

水力学の分野の研究室を見学した。縦、横、深さが何 m もある巨大な水槽のような装置を使って、水流の動きと、その動きが船に与える影響を研究している様子であった。

4.Aero Lab Tour

空気力学の分野の研究をしている研究室を見学した。流体の中でも、特に飛行機の翼付近を流れる空気がどのような動きをし、それが翼にどのような力を与えるのかを、風洞装置を用いて捉えようとしていた。翼後方の気体粒子の写真をカメラで何枚も撮り、それをパラパラマンガのようにつなげることで、気体粒子の位置の変化をとらえているとのことだった。

5.NIMS Lab tour

NIMSとはNanostructured Interfaces and Materials Science Groupの略である。細胞内の物質の流動や抗原抗体反応、ナノカプセルの研究を行い、さらには有機合成も行っている施設であった。東工大内でもドラッグデリバリーを扱った研究室はいくつかあるが、規模がこちらの方が大きかった。実験機器も充実しており、学生室も広々としていて、安全管理も徹底していた。学生のほとんどがPhDだったが、学生は十数人ほどの規模で、日本の研究室とは違い、非常に多くの分野に関して研究している。そのため、有機系を専門とする人からコンピューター解析を専門とする人まで様々な分野の専門家が集められているようだった。内部に研究室はいくつもあり、それぞれが独立に動いている印象であった。

- ・日本の研究者もたまに訪れるようだったが、このレベルの研究が大学内でできるというのはやはりそれだけの設備がそろっているからなのだと感じた。
- ・生物を学んでいる自分としては、ラボ内のクリーンベンチやピペットマン、保護メガネなどの馴染み深い実験器具を見ることができ、満足している。



図 4-2-4-1-2.NIMS ラボツアーの様子

6.Teaching Lab Tour

メルボルン大学の学部生が実験で使う実験室を案内していただいた。訪問した施設は、電気電子分野向けのものや化学、建築、生命向けと多様であった。電気電子分野向けの実験室では、オシロスコープや、半田ごてなどが見受けられた。(図 4-2-4-1-3) この実験室は、東工大のものづくりセンターのように学生が自由に使えるスペース内にあった。開発用の部屋にはいくつものロッカーが設置されており、学生たちが作っている途中の物をいくつか見ることができた。この近くの倉庫には、学生のプロジェクトで製作した F1 カー (図 4-2-4-1-4) があり、それも見せていただいた。3D プリンターが何台も設置されている部屋もあり、実際に印刷して作った自転車のチェーンを見せていただいた。学生が最先端の設備を利用してものづくりを行っていることが分かった。化学系の実験室では、自由に動かすことができる実験台 (図 4-2-4-1-5) が置かれており、そのような実験台もあるのかと知り、驚いた。何週にもわたる実験ができるように考えられていた。化学系の実験室の横には、建築や土木に関連する実験室があり、いたるところに実験装置があった。その一例を挙げると、雨を人工的に降らせて河川がどのように形成されていくのかを実際に見る装置 (図 4-2-4-1-6) や、縦横の揺れを発生させて建物がどう変化するかを観察する装置 (図 4-2-4-1-7) などであった。また、実験で作った鉄筋コンクリート (図 4-2-4-1-8) がいたるところに置いてあった。生命系の実験室には試料を冷凍保存するための装置などが置かれていた。以上のツアーを通して、メルボルン大学の実験室の設備はとても整っていると感じた。



図 4-2-4-1-3.電気電子分野向けの実験室



図 4-2-4-1-4.倉庫内の F1 カー



図 4-2-4-1-5.可動式実験台



図 4-2-4-1-7.起震台

図 4-2-4-1-6.土木工学用の降雨機



図 4-2-4-1-7.鉄筋コンクリート

キャンパスツアー、ラボツアー全体を通しての感想

以下では、研究室見学を通して気づいた点を箇条書きにする。

・メルボルン大学の研究室ツアーで見学した研究室や実験室はどこも規模が大きく、設備も充実していた印象がある。研究室に関しては、建物のワンフロア全体を広々と使っている上に、そこに大規模な実験装置を設けており圧倒された。

・実験装置が、大規模なものから学生実験で使うような小規模なものまで幅広くあり、充実していた。

・全体を通じて、設備が非常に充実しているという印象を受けた。例えば熱力学系の研究室ではエンジン等の見学が行えたが、非常に大きな施設の中に様々なタイプの装置が用意されていて驚いた。

・メルボルン大学では学生実験にかなり大規模な装置を使うこともあるようだった。

また、学生が授業外で研究開発を行うことが出来るような設備も非常に充実していた。

・大規模な実験装置の例としては、航空機や気体力学の研究でよく用いられる風洞装置が挙げられる。これは人工的に風による流れを発生させ、実際の流れ場を再現し、観測するものである。流れ場の再現のためにこの風洞はある程度の大きさが必要とされる。東工大にも以前はこのような装置があったが、現在はなく、利用する場合は他の施設に依頼しなければならない。大規模な実験装置だけでなく、学生実験棟も充実していた。

・学内にこのような研究設備が整っていることは、学生の研究意欲を促進するだけでなく、しっかりとした知識や経験として定着し、未来の研究者育成につながっていくのだと感じた。

- ・どの研究室も大学からの援助が行き届いているという印象を受けた。
- ・ほとんどが専門外の分野だったので理解が難しかった部分も多かったが、実験装置についての説明を聞いたり、実験装置を用いて実際に記録した映像データを見たりすることが出来て貴重な経験になった。
- ・研究室見学では、自分が学んでいる分野以外の分野だったこともあり、英語を理解するのがかなり難しかった。
- ・日本で学んだことがある分野は何を言っているか把握することができたが、知らない分野だと理解することは難しかった。
- ・今回の研究室見学では情報科学に関連する研究室を回れなかった点が少し残念である。一方で、自分のあまり知らない分野の研究室を訪問できる貴重な機会でもあったため、とても勉強になったと感じる。

4-2-4-2. 各自の見学

Melbourne University Table Tennis Clubの練習への参加

練習日の当日にアポイントを取ってしまったが、快くすぐに参加しても良いという旨の返信をくださったことから、心の広い団体であると感じた。練習に参加してみたところ、新歓の時期であったことから、卓球初心者とみられる人たちもかなり練習に参加しているように見受けられた。そのため、練習というよりは各々が楽しく打ち合いをしている様子であった。また、大学生だけでなく中年とみられる男性も練習に加わっていることから、学生だけでなく社会人の人に対しても練習の機会が広がられているのを感じた。私と一緒に打ってくれた学生は10年卓球の経験があると聞き驚いた。海外でも、卓球は幅広い世代に親しまれていると感じた時間であった。そのため、卓球は外国の人たちと交流の機会を増やしてくれる良いスポーツだと感じた。またメルボルン大学に来る機会があれば是非練習したい。

メルボルン大学について

古い建物と新しい建物が入り混じっていた。歴史ある建物にはレンガが使われていて雰囲気があった。映画に出てくる世界にいるようだった。中央に大きな芝生の広場があり、休憩時間はそこで休む学生が見られた。私達も空コマにそこで軽食を食べたりしていた。構内に大きな寮がいくつかあった。歴史ある建物で、そこで暮らせたら楽しいだろうと思った。

大学内の施設

生協

メルボルン大学の生協には、学生が購入する教科書や筆記用具、さらには、メルボルン大学のグッズが売られていた。東工大と同じように、会員になれば、商品を安くして買うことができる。同じ建物内にはカフェがあり、とても和やかな雰囲気に包まれていた。ちなみに、近くのトイレの入り口には、平方根や不等号、四則演算記号がデザインされており、東工大にも是非取り入れてほしいと強く思った。



図 4-2-4-2-1.生協の前のおしゃれなトイレ

カフェ

学内には複数のカフェが点在しており、学生にとっては憩いの場として利用されている。その中でも、私は House of Cards がお気に入りである。名前にトランプと入っているように、番号札としてトランプのカードが使われており、独特で面白いと思った。それだけでなく、コーヒーや食品の種類が豊富なのである。授業が 8:00 から始まる時は、ホテルで朝食をとる余裕が無かったため、授業終わりにこのカフェに寄ってバナナブレッドを食べていた。

大学内の施設とクラブ活動

Brownless Biomedical Library

大学内には分野ごとにいくつかの図書館があり、そのうち生体医薬関係の本を取り扱った Brownless Biomedical Library を見学した。建物は地下 1 階から 2 階まで続いていて、そのすべての階に医学雑誌や専門書が並んでおり、一つの分野でこれほどの

蔵書があるということに大変驚いた。また建物内には博物館が併設されていて、その分野の歴史を示す展示が多くみられた。中には試薬瓶やフラスコなど、昔使われていた器具も多く、学習意欲を掻き立てられるような気持ちになった。



図 4-2-4-2. Brownless Biomedical Library 内展示

(1) Sports Centre

大学内には Sports Centre と呼ばれる施設があり、トレーニングルームからプール、野外の施設までを一括に管理していた。これらの施設は一般の人でも利用することができ、私はトレーニングとしてプールを利用した。一般の人だと1回5ドルかかるようだったが、学生だけでなく子供から大人まで多くの人が利用していた。ロッカーもボタン式になっていて、セキュリティーの面でもしっかりしており、大学内のトレーニング施設としては完璧だと思う。

(2) クラブ活動

メルボルン大学の陸上クラブ“Athletic Club”に大学の授業が終わった後、練習に参加させていただいた。現地では2日間練習に参加することができ、同じ練習に参加した人とも交流を持つことができた。Athletic Clubはその半分が社会人で私が交流したのも学生ではなく、外部から参加している社会人が多かった。年齢は離れていたが、穏やかに接してくれたので、壁を感じることはなく楽しく交流を行うことができた。特にコーチの Tony さんには日本にいる時から連絡を取り合い、メルボルン滞在中も気にかけてくれたので、学生だけでなく、現地の人との密な交流をするよい機会を得ることができた。日本のクラブ活動との違いは練習環境と横のつながりが広く浅いということだと思う。大学内には400m タータンのトラックだけでなく、ほかのスポ

ーツが行える人工芝のグラウンドがいくつもあった。また大学の外部から自由に練習に参加できるので、正規のクラブの選手は少なく、初めて顔を合わせるという選手も多く見受けられた。練習環境は大変恵まれており、クラブ活動も刺激的に感じられた。

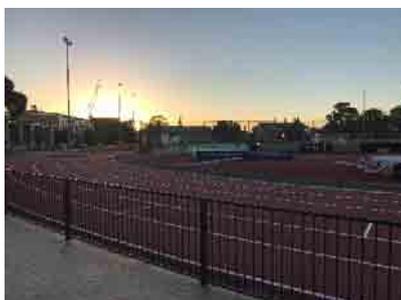


図 4-2-4-2-3.メルボルン大学内の陸上トラック



図 4-2-4-2-4.Athletic Club の人との写真

4-2-5.学生交流

ここでは、3月8日(木)のTokyo Tech Promotion Sessionにて我々が行った、自己紹介プレゼンの概要と学生の反応、私たちの感想について述べる。

今回行ったプレゼンは、日本の紹介と東工大の紹介の2部構成とした。詳しい内容は以下の通りである。

1.日本の基本情報

「日本の基本情報」では、日本の人口や面積をオーストラリアのそれと比較して伝えた。具体的には、日本の人口はオーストラリアの 5 倍であるが、オーストラリアの面積は日本の 5 倍であることを伝えた。



図 4-2-5-1.プレゼンの様子

2.日本の自然

私は「日本の自然」を担当し、日本の四季について写真をスライドに写しながら説明した。春は桜の紹介と日本人が桜を特別大事にしているということについて、夏は猛暑が続きみんなぐったりしてしまうということ動物の写真を使ったりして説明した。秋は紅葉と日本古来の建築物の融合について、冬はオーストラリアではあまり降らない雪について説明した。

質問の時間にも季節について「どの季節がオススメか」という質問があり、メルボルン大学の方々にも少し日本の四季について興味を持ってもらえたと思う。

3.日本の名所の紹介

トリップアドバイザーが実施した外国人へのアンケートによって選ばれた3つの場所の紹介をした。一つ目は、伏見稲荷大社、二つ目は秋葉原のフクロウカフェ、三つ目は広島
の平和祈念資料館である。これら以外にも、日本には素晴らしい場所がたくさん存在する
ことを言いたかったが、うまく英語で伝えきれず、聴衆の反応は期待していたものよりも
薄い印象であった。もっと日本の名所について詳しく伝えたいと感じた。

4.日本の文化

具体的には、寿司や柔道、剣道、ドラえもん、ONE PIECEが日本由来であることを紹
介した。寿司に関しては、クイズ形式で紹介したため反応が良かった。

5.日本とオーストラリアとの関係

「日本とオーストラリアの関係」では、日本とオーストラリアの輸送の歴史について細か
く話した。

6.東工大の位置

7.東工大の象徴

私が担当した箇所は、東工大のキャンパスの場所、シンボルマーク、そしてマスコットキ
ャクターの紹介である。

最初はキャンパスの場所について。東工大が東京の大岡山とすすかけ台にあることを伝
えるために、まずは東京が日本国内のどのあたりに位置するかを説明した。日本地図をスラ
イドの左下隅に配置し、東京の場所に矢印をつけることで分かりやすさを重視した。スライ
ドの中央には東京都の地図を映し、大岡山とすすかけ台の位置には大きく○印をつけてお
いた。しかしそれだけではパツとしないはずなので、都内の観光地として有名なスカイツリ
ーの場所にも○印をつけた。これにより、両キャンパスの位置関係を明確に説明できたと思
う。

次は、東工大のシンボルマーク「窓ツバメ」の紹介である。窓ツバメは「工」と「大」と
いう2つの漢字からなるマークであるが、漢字に親しみがない英語圏の人々にいかにその
事実をわかりやすく説明するかで苦労した。

最後には工大祭マスコットキャラクター「テックちゃん」を紹介した。テックちゃんは海外でありがちなマスコットキャラクターとは毛色が違い、いわゆる萌えキャラのような可愛らしさがあるため、魅力の説明には力が入った。

8.東工大の世界ランキング

9.東工大の沿革

自己紹介プレゼンでは、私は大学の世界ランキングと東工大の沿革の箇所を担当した。他の項目と比べ、内容が硬いこともあったため、なるべく簡潔に伝えるよう心がけた。

10.東工大の学生

11.東工大のキャンパス

東京工業大学の学生とキャンパスについての紹介を担当した。

学生については男女比で圧倒的に男子が多いこと、また留学生の数、割合や工学の分野で優秀な生徒が多いことを紹介した。男女比の部分では驚いている学生がたくさんいて、工学の分野では男性の割合が圧倒的に多いという考え方はメルボルン大学には当てはまらなかったようだった。

またキャンパスについては東京工業大学の特徴的な建造物について紹介し、図書館を学生がその形からチーズケーキと呼んでいるという話は思ったより反響があって少し安心した。

全体として現地の学生の反応が思ったよりもよく、日本だけでなく、東京工業大学にも興味を示しているのを感じ取れた。東京工業大学主催のプログラムの説明を熱心に聞いている生徒が多く、少しでも現地の人に東京工業大学をアピールできたのであれば嬉しい。

12.東工大の教育

東工大には6学院があり、それぞれ系を持つことを具体例を用いて説明した。

13.東工大の一年

東工大が4クォーター制であることや、花道、工大祭といった年中行事があることを紹介した。

プレゼンを通して、想像していたよりも多くの人がプレゼンを見に来ていて驚いた。担当分野が少し多く、プレゼンを暗記して挑むことができなかつたのが少し悔やまれた。思ったよりは緊張せずに話すことができた。現地の学生も真剣に聞いてくれた。メルボルンの学生

が「日本で好きな季節はいつですか」と質問もしてくれた。全員でその質問に答えることができたのでよかった。オーストラリアに行く前に何回か練習しておいてよかったと思った。オーストラリアに着いてからはなかなか練習をする時間が取れないので、早めに準備しておいた方がよいだろう。

14.東工大生の一

東工大生の一について紹介した。授業や休み時間の過ごし方などについて個人的な内容も含めながら解説した。メルボルン大学の学生たちは興味を持って聞いてくれたと思う。東工大生がキャンパス付近のラーメン屋に通っていることを話したとき、笑ってくれた学生がいて嬉しかった。

15.東工大のサークルとクラブ活動

私は、東工大で盛んな部活動・サークルについてのプレゼンをした。自分の所属しているサークルの話をする中で、身近に感じてもらえるように工夫した。ヴィオラのことを知っている学生が7割ほどいたことに驚き、うれしかった。日本とは知名度の差があるのかもしれない。

16.東工大の研究

「東工大の研究」では、白川英樹教授と大隅良典教授による研究について紹介した。正直に言うと、担当箇所は総合的に見て、比較的難しい内容であったため、視聴者の中に退屈な人が出ることを予想していた。しかし、全員が私のプレゼンに耳を傾けてくれたため、とても感動した。日本ではこのようなことは考えられず、メルボルン大学の学生の普段の授業態度の良さを改めて実感することができた。また、プレゼン後にも、学生が何とか質問を絞りだしてくれた。「おすすめの季節はいつか。」や「なぜこの派遣に参加しているか。」などの質問に、片言ながらも答えを返せたことに非常に満足している。次の日には、視聴者の一人と食事に行ったり、キャンパス内で話しかけられたりと、交流を楽しむことができた。

5.その他

5-1. 食事

この章ではオーストラリアの、特に今回訪問したシドニーとメルボルンにおいて体験した食事やお店の種類、価格帯、日本の日本食との比較、グルメについて述べる。

5-1-1. シドニーでの食事

今回、シドニーには2日目の3/2(金)から4日目の3/4(日)の朝まで滞在した。いただいた特徴的な食事の写真と説明は46ページに掲載してあるので、そちらを参照いただきたい。

お店の種類

シドニータワーの近くにあったフードコートには、日本にもあるマクドナドやケンタッキーマスタード、アメリカ由来のファストフード店が立ち並び盛況であった。それ以外にも、タイ料理、ベトナム料理、中華料理、インド料理、トルコ料理などを扱っている専門店がいくつも存在して、食べ物の種類には困らないと感じた。このフードコートで私は、ケバブ(図5-1-1)を食べた。

価格帯

オーストラリアで一般的なスーパーColesの価格帯について述べる。日本と同じ印象を受けたが、オーストラリアで有名なお菓子Tim Tam (図5-1-2) は2つで5ドル (=425円) とお買い得である印象を受けた。

日本の日本食との比較

Colesで売っていたお寿司のお米は日本のお米と違い粘り気があって、日本人好みのものではなかった。具材もサーモン&アボガドであり、具材からも日本人との寿司に対する認識の違いを感じた。(図5-1-3)

5-1-2. メルボルンでの食事

今回、メルボルンには4日目の3/4(日)から10日目の3/10(土)の朝まで滞在した。いただいた食事の写真と説明は46,47ページに掲載してあるので、そちらを参照いただきたい。

お店の種類

メルボルンの中心街メルボルンセントラルにはフードコートがあり、そこにはシドニーと同じくいろいろな国の料理を扱っている専門店が立ち並んでいた。ここで私は、インドカレーを食べた。(図5-1-4)

価格帯

シドニーと同じような価格帯であった。ただ、メルボルン大学の周辺は学生が多いため、学生には割引価格で提供している店が多い印象にあった。学内にあるUnion Houseという学生食堂のような施設にはたくさんのお店があり、大きめのパニーニ(図5-1-5)を\$8.90(=約750円)で売っているお店もあり、価格は街のものよりも低く、割に合うものであった。

日本食の日本との比較

メルボルンでは、滞在ホテル近くにある「代々木 yoyogi」という寿司バーで、サーモンのお寿司(図5-1-6)を買い、食べた。Colesで売っているものとは違い、お米が日本のものに近い食感がしたために、美味しく頂くことができた。日本の地名を冠している専門店の味は日本のものに近いのではないかと感じた。

グルメ

メルボルン滞在4日目の3/7(水)の午後に行ったパブで、ステーキ(図5-1-7)をいただいた。これは、\$14(=約1190円)でとてもお得であり、とても美味しかった。英語圏らしくステーキの固さをrare, medium, well doneから選べることができた。メンバーの中には、medium rareの固さを注文している人もいた。

特徴的な料理の写真一覧



図5-1-1.ケバブとポテトフライ



図5-1-2.Colesで売っていたTimTam



図5-1-3.Colesで売っていた寿司



図5-1-4.シドニー市内のフードコートのカレー



図5-1-5.Union Houseのパニーニ



図5-1-6.yoyogi寿司のサーモンのお寿司



図5-1-7.パブでいただいたステーキ



図5-1-8.フィリッパ島で食べたハンバーガー



図5-1-9.ホテル近くでいただいたベトナム料理フォー

5-2.街の様子

5-2-1. シドニー

シドニーは市外と市内と異なる雰囲気を感じられた。シドニー市外は住宅街となっており、区画はきれいに整備されていて、一直線の道路とそこに路駐されている車の長い列は印象的であった。また海岸に近づくと、高級な住宅街が立ち並び、市内を一望できるようなスポットがたくさん見受けられた。広大な自然を身近に感じられるスポットが多く、自然の造形が街にうまく溶け込んでいた。



図 5-2-1.海岸近くの高級住宅街



図 5-2-2.展望スポット

シドニー市内に入ると背の高い建物が増えてきて、街の雰囲気も華やかに感じられた。街の中心にそびえ立つシドニータワーと人で活気付いたストリートはシドニー市内を象徴するシンボルと言えるだろう。シドニー市内には観光地が集中しており、歴史ある建造物のほか、広大な植物園や公園が併設されていた。公園に用意されたチェス盤を利用する人や博物館前でパレードの練習をするなど趣味に勤しむ人もいれば、芝の上でくつろいでいる人もいて、休日を有意義に過ごす人がたくさんいるのが印象的だった。またストリートは高級ブランドの店が立ち並び、休日ということもあってかストリートパフォーマンスがいたるところで行われていた。年齢層も様々で子供がラップを披露する姿にはシドニーの寛容で活気付いた雰囲気を感じ取ることができた。



図 5-2-3.公園内のチェス盤

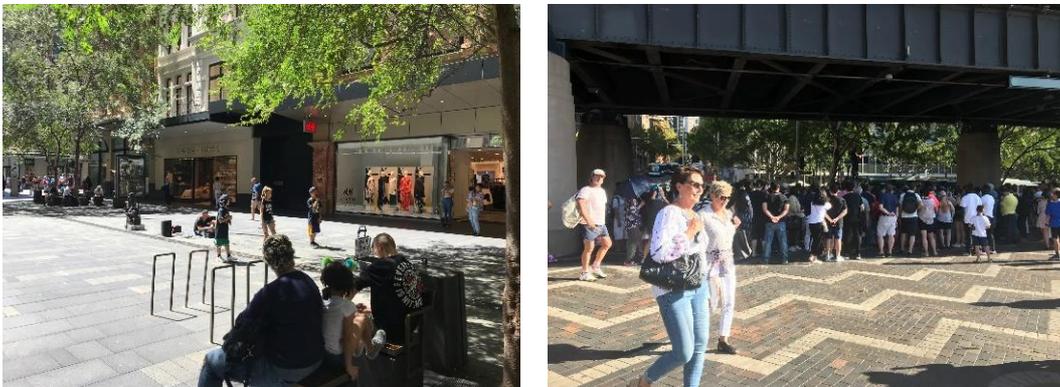


図 5-2-4.ストリートパフォーマンス

5-2-2. メルボルン

メルボルン市内はシドニー市内とは異なり、小売店がひしめき合うような雰囲気、人も大変多く、活気付き方もシドニーとは異なる印象を受けた。日本に例えるならシドニー市内が銀座でメルボルン市内が渋谷といったところだろうか。道路は綺麗に整備されていて、トラム、車、自転車、歩行者の4つの道路が厳格に区分されている道路はメルボルン特有の光景と言えるだろう。



図 5-2-5.メルボルン市内の道路

またメルボルン市内にはたくさんのストリートがあり、それぞれに違った特徴がある。トラムが通り、私たちが大学に向かいのに利用した通りでは夕方になるといたるところでパフォーマンスが行われていた。歌からダンス、演奏まで様々で異国の文化をそこに感じ取ることができた。またフォールアートも所々に施されていて、市内の賑やかさを印象付けるものであった。さらにアーケードと呼ばれる通りも幾つかあり、英風の華やかな雰囲気も特徴的である。市内から少し離れると巨大な歴史的建造物もあり、これらの多様性の中に移民の国ならではの文化の融合を感じ取ることができた。

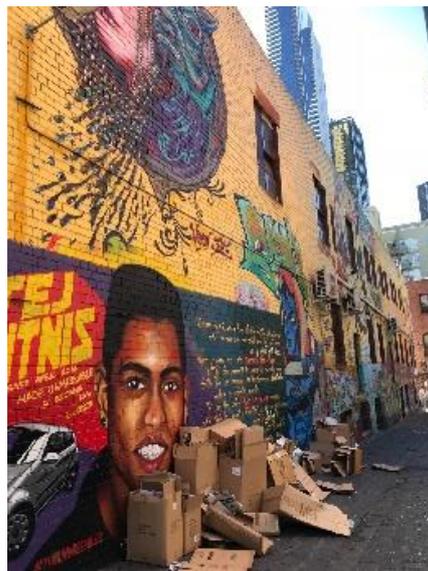


図 5-2-6. フォールアート



図 5-2-7. アーケード (左 : royal arcade 右 : block arcade)

5-3. 観光

5-3-1. シドニー観光

5-3-1-1. Bondai Beach



図 5-3-1. ボンダイビーチ

青い空に青い海、白い砂浜が広がる気持ちの良い場所だった。砂がとても細かくサラサラしていて、裸足で歩くことができた。水もきれいに透き通っていた。Bondai Beach は一年

を通してサーファーが狂喜するような波が押し寄せるサーフィンのメッカである。そのため、サーフィンを楽しむ観光客が多くいた。夏に訪れるのにふさわしい場所であった。

5-3-1-2. オーストラリア博物館



図 5-3-2.オーストラリア博物館

MUSEUM 駅から徒歩3分に位置する博物館である。人類学、生物学、鉱物学などのほかに、オーストラリア固有の動物や歴史、自然科学に関する展示がなされている。展示物の数が非常に多く、充実した博物館であった。それぞれの展示物に説明があるため、じっくり見ると半日かかるかもしれないほどであった。個人個人自分のスピードで展示物を見ていた。訪れたのが土曜であったためか、親子で来ている方が多くみられた。

5-3-1-3. セントメリー大聖堂



図 5-3-3.セントメリー大聖堂

ハイドパークの隣に位置する。オーストラリア博物館のすぐ近くにあるため、合わせて訪れるとよいだろう。オーストラリアのカトリックの中心となる大聖堂である。また、南半球最大級のゴシック建築だ。外から見ても迫力のある建物だが、聖堂内には美しいステンドグラスが施されているので訪れた際にはぜひ聖堂の中も観覧してほしい。土曜日の朝から多くの信者が訪れていた。

5-3-1-4. オペラハウス



図 5-3-4.オペラハウス

オペラシアターなどの4つの劇場とレセプションホール、レストラン、バー、図書館、アートギャラリーなどが入った巨大な芸術総合施設である。着工から14年の歳月と莫大な費用をかけ、1973年に完成した。オペラハウスは土台、屋根、内側の建物の三つの部分に分かれている。球形を分離して組み合わせた屋根は実現が難しいといわれていた形を実現させた。屋根自体に支えはないというのが驚きである。この屋根には白と黄色の2色のタイルが配置されているが、これは太陽の反射を防ぎ、眩しくならないようにするためである。また、窓ガラスが斜めになっていて、夜に自分が反射しないようにすることで夜景をきれいに見せている。このように細部までこだわった工夫とデザインが施された建築物である。2007年には「人間の創造的才能を表現する傑作」として世界文化遺産に登録されている。日本語ツアーは25ドルであった。建物の中に入れる上に、歴史や建造物の説明をしてくれるため参加することをお勧めする。私たちは昼間に行ったが、夜に訪れた場合はライトアップされたオペラハウスを見ることができるだろう。

5-3-2. メルボルン観光

5-3-2-1. フィリップ島



図 5-3-5. フィリップ島の馬

フィリップ島はメルボルンの南東約 140km のところに位置する島である。この島ではペンギンパレードが開催され、世界最小のペンギンである「リトル・ペンギン」に会うことができる。私たちはオーストラリアに行く前にツアーに申し込んだ。

ツアーではチャーチル島とコアラセンター、ペンギンを見ることができるサマーランドビーチに案内された。バスの中からは多くの野生のワラビーを見ることができた。チャーチル島では馬や羊、オウムなどの動物を見ることができた。コアラセンターでは多くのコアラを見ることができた。コアラが木にしがみついているのが可愛かった。ペンギンパレードは夕方から夜にかけて行われる。日が落ちたところにフェアリーペンギンが海から巣に戻る様子を観察することができる。数匹で群れを作り、時々休みながらヨチヨチと歩くペンギンの姿を観察することができた。写真を撮ることは固く禁止されているので、気を付けるべきだ。双眼鏡があれば便利かもしれない。また、夜の海岸は冷えるので防寒着は必須である。この日はホテルに着くのが夜の 12 時近くになったので、翌日の予定を組む時は考慮に入れていた方がよさそうだ。

5-3-2-2. 州立図書館



図 5-3-6. 州立図書館

昼間は図書館の前の芝生でパソコンを広げ作業をする学生がいた。日本ではあまり見られない光景だ。図書館の中は絵が飾られているスペースがあり、ミュージアムのような作りになっていた。自習スペースが充実していて、多くの机が並んでいた。複数の自習スペースがあり、場所を変えることで飽きずに勉強をすることができるなど感じた。高校生や大学生が勉強に取り組んでいた。この図書館ではチェスやシャンチー（中国版の将棋のようなもの）を楽しむことができる。やり方が分かる人はやってみてもいいかもしれない。夜になると照明が暗くなり、雰囲気ができる。吹き抜けになっている場所があり開放的な空間で勉強をすることができる。

5-3-2-3. メルボルン動物園



図 5-3-7.メルボルン動物園

1862年に設立された、オーストラリア最古で世界でも3番目に古い動物園である。メルボルン大学のすぐ近くに位置する。午前に行ったためか、寝ている動物が多かった。動いている動物の姿を見たければ、昼頃や食事の時間を狙って訪れた方がよかったかもしれない。また、日本の動物園よりも広く、開放的な空間で動物を飼育しているため、近距離で動物をみることはなかなか難しかった。のびのびと暮らす動物の姿が観察できる。動物園の中は自然が多く、ジャングルみたいだった。日本庭園もあったが、日本人から見れば、少し違和感がある。カンガルーやコアラ、ワラビーその他にもオーストラリアの動物を見ることができ、貴重な体験となった。

5-3-2-4. クイーンビクトリア・マーケット



図 5-3-8.クイーンビクトリア・マーケット

メルボルン最大のマーケットである。11 月末から 2 月末は毎週水曜にナイトマーケットが開かれる。野菜や果物などの生鮮食品を中心に、雑貨や生活用品も扱っている。お土産を他の店より安く手に入れられることができる。ショッピングを楽しみたい人は是非訪れるべき場所だろう。レストランもあり、そのパエリアはとてもおいしかった。曜日により早く店が閉まってしまうのであらかじめ調べておいた方がよさそうだ。

5-4. 交通規則

オーストラリアにおいて、車は左側通行で右ハンドルである点は日本と同じである。一方で、オーストラリアの交通規則や道路標識には、日本とは違う点もいくつかある。そのいくつかを紹介したい。

1 点目は、シートベルトを必ず着用しなければならない点だ。これは、路線バスに乗る際や乗用車の後部座席に座る際でも例外ではない。シートベルトを着用していなければ、その責任は運転者ではなく、着用していない人にあるとされ、290 豪ドルほどの罰金が課される。

2 点目は、横断歩道がしましま模様ではない点だ。歩行者が横断する場所の左右に白線が引かれているだけなので、オーストラリアに到着したばかりのときは、どこを渡ればよいの

かわからず戸惑った。

3点目は、横断歩道が押しボタン式である点だ。下図のような押しボタンが付いており、これを押しなければ歩行者用信号は青にならない。押し忘れると、待っているまわりの人に対して申し訳ない気持ちになる。



図 5-4-1.信号のボタン

4点目は、自転車用のレーンがある点だ。歩道に人が多いからと言ってうっかり自転車レーンを歩こうとすると危険である。日本とは違い、自転車レーンの幅はかなり広く、まるで車道のようなものである。

6.所感

(第7類・学部1年)

私は英語の上達を目的に今回の超短期派遣に参加した。もちろん、10日間で英語力が上がると思っていた訳ではないが、10日間でこれから先英語を学ぶ際のモチベーションが上がるのではないかと思った。「留学」という形で海外に行くのは初めてだった為、短い期間で自由に海外での学生生活を経験することができるこのプログラムを選んだ。

ニューサウスウェールズ大学や、メルボルン大学を訪れると設備がしっかりしていることに驚いた。広々とした研究室、巨大な研究設備、充実した勉強スペース、食堂など、日本の大学の設備が普通だと思っていた私にはとてもショックな発見だった。

留学中の5日間はメルボルン大学に通った。メルボルン大学では様々な分野の授業をとって見たのだが、東工大で開講されている授業よりも幅広い授業が行われているなどという感想を持った。生物系の学科の授業でも物理、化学、数学色の強い授業が多く、もっと受けてみたいと思った。

メルボルン大学は東工大よりも大学世界ランキングがとても高く、私はメルボルン大学の授業はとてもレベルが高いのだろうと思い、恐る恐る1年生の微積の授業に出てみた。すると、意外と簡単で日本では高校生が習う内容を取り扱っていた。では、なぜ世界ランキングがこんなに高いのか、大学を卒業するまでには逆転されてしまうのか、それともランキングには研究力なども考慮されていて、学力以外の要素で逆転されてしまうのだろうか、など海外と日本の大学の差の原因がわからず、とても疑問に思った。

メルボルン大学の日本語クラブとの交流会の中で何人か友達を作ることができ、その中の一人と夕ご飯を食べに行くことができた。その友達自身も中国からの留学生で、オーストラリアの現地の人と母国の人の考え方の違いを教えてくれてとても心に響いた。就活についての悩みなども話していて、悩む内容も世界共通なのだなど改めて実感した。

最後に、今回の派遣ではたくさんの友達を作ることができ、たくさんの街の人と話す機会があった。私のまだまだレベルの低い英語でも会話をし、笑い合うことができ嬉しいとも思ったが、もっとみんなとスムーズに会話ができたらどんなに楽しいだろうかと思った。このように感じる事ができたのが私の今回の派遣での一番の収穫であり、これから英語の勉強をする際の一番のモチベーションになると感じている。

(第3類・学部1年)

今回私がオーストラリアに行き、得たものは何よりも自分への信頼だと思う。遠い異国の地でも先生方の助けを借りることで、自分ができないと思っていたことができた。それ

は、メルボルン大学の卓球部の方に練習に参加する旨のメールを送信し、実際に練習に参加したことだ。自分の力で、自分のやりたいことを実現できた実感を得ることができた。ただ、一方で大学では、自分の知らない内容を講義してもらおうと全くわからなかったことから、自分の学習に対する姿勢の未熟さを感じた。その経験から、講義を聴き、自分の意見を述べるために英語を、また自分の専門内容である化学を学ぼうとするモチベーションを上げることができた。また、英語に関しては自分の拙い英語でも、ある程度は現地の人に自分のことを理解してもらえた気がした。ただ、お店において商品を会計する際に店員さんの言っている単語がわからなかったり、こちらの質問を相手が理解してもらえなかったりした時はとても困った。困ったからこそ、次は快適に買い物ができるように自分の英語を磨くことが必要だと感じた。ただ、このように英語が通じない場面があったからといって今回の研修が辛かったというわけではない。実際には、大学の講義以外は街で買い物を楽しんだり、一日中空いている日は遠出して動物を見たりと観光も十分楽しめたと思う。街の中を歩いたり、遠出する中で気づいたことがある。それはオーストラリアの都心は日本よりも緑が多く、また、多種多様な人を受け入れる心の広さを持っているということだ。シドニーには、街の中心部にあるハイドパークが、メルボルンではメルボルン大学内の緑が、私の心を癒してくれたと思う。街中には、中国系の人や、ヨーロッパ系の人、アフリカ系の人など多種多様な人種の人々がいて、自分が観光客であるということを忘れるくらいに街に溶け込むことができた。この二つの特徴のおかげか、シドニー、メルボルンともにとても過ごしやすかった。今回の経験を通して、将来は是非オーストラリアに長期滞在したいと感じるようになった。長期滞在をするにあたり、最低限、英語力と資金力は必要だと感じた。これからは、この二つをどう獲得していくのかをよくよく考えながら大学生活を過ごしていくつもりだ。

(第7類・学部1年)

私が今回の超短期派遣に参加したのは、学部生のうちに外国へ行ってみたいからだった。今まで一度も日本から出たことがなかったため、外国へ行くことで、自分の視野を広げておきたいと思った。いくつかのプログラムの中でオーストラリアへの派遣を選んだのは、自分の好きな分野の授業を受講することができる点に魅力を感じたからだ。さらに、ホームステイではないため、英語力に自信のない私でもなんとか生活できそうだと考えた。

オーストラリアへ行って見て、あらゆる境遇の人に対して寛容な国だと感じた。シドニー・ゲイ・アンド・レズビアン・マルディグラでは、あちこちで多様性を象徴する虹色の装飾がされており、公然と同性同士でハグする姿が見られた。また、電動車いすで人混みを移

動していく人をよく見かけた。そして、中国系の顔立ちの人も多く、外国人であってもあまり目立たなかった。日本においてはマイノリティの人は特別扱いされることが多いように私は感じていたので、衝撃を受けた。

私がこのプログラムで最も貴重な経験だったと感じたのは、メルボルン大学で一週間大学生活を送ったことだ。自分で受講する講義を決めたため、たまに空きコマがあり、曜日によって行く時間も帰る時間も異なる、というように、まさに留学体験ができた。大学内や近くにあるカフェを楽しんだり、授業後にビーチに足を伸ばしたりするなど、メルボルンならではの経験もできた。単独での自由行動がここまで許されるのは、このプログラムの大きな特徴であろう。これまで留学に対して漠然としたイメージしかなかったため、なんとなく越えられない壁を感じ、異国で長期間過ごすことへの抵抗も多少あった。しかし、今回の派遣のおかげで、留学するとどのような生活を送るのか、具体的に想像することができた。留学への不安がかなり軽減されたのは大きな収穫である。

今回の派遣を通じて痛感したのは、自分の英語力の乏しさだ。日常生活に困らない程度には自分の英語でも通じた。しかし、オーストラリア博物館の展示物の説明書きを理解できなかったり、フィリッパ島へのツアーでガイドさんの説明が聞き取れなかったりして、悔しい思いをした。また、もっと自在に英語を話せば現地の人とのコミュニケーションがより楽しめたのではないかと思うと非常に残念である。自分の英語力の向上については、今後の課題である。

最後になりましたが、今回お世話になった引率の先生方、グローバル人材育成推進支援室の皆様、11日間行動を共にしたメンバーの皆様、そしてこの留学を後押ししてくれた両親に心から感謝いたします。

(第2類・学部1年)

今回訪れたシドニーとメルボルンはどちらも移民や留学生、観光客などオーストラリア以外の国出身らしき人々で賑わっていたのが非常に印象的だった。そのためか、お店の店員なども英語圏以外の人への対応に慣れており、また治安も非常に良く、今回が初の海外渡航だった私でも安心して過ごすことが出来た。町の人々は他人に対しても友好的に接してくれる人が多く、それも今回の留学がよい思い出になった理由の一つだ。

期間中、一週間通って授業を体験したメルボルン大学でも、留学生が非常に多かったことが印象に残っている。活気あふれるキャンパス内では様々な国籍の学生たちが会話を楽しんでいる様子を何度も見かけた。また、日本語クラブをはじめとして、メルボルン大学の学生と交流をする機会もたくさんあった。このような経験は私にとってはどれも初めてのこ

とであり、今まで国内でほぼ日本人とだけ交流を持っていた自分の世間の狭さを感じた。

今回の海外派遣プログラムに参加する前は、留学をしてレベルの高い海外の大学に通い、英語だけを使って毎日を過ごすことはとても大変で負担のかかることだと思っていた。しかし実際に経験してみると、英語がうまく伝わらずに困ることが全くないわけではなかったが、大学の講義内容は日本とあまり違いがなく、日常生活を送る上でも大きなトラブルはなかった。また、先ほども述べたように外国出身の人が多いためか、スーパーや飲食店なども様々な国籍に対応していた。そのため、もう少し英会話さえ上達すれば、海外の大学に留学することは今までイメージしていたよりもハードルが低いということに気づいた。今回の経験を通して、長期留学をする意欲や英語学習へのモチベーションを高めることができたと思う。

そして、英語を上達させるためには実際に英語を使うことが一番であるということにも、今回気づくことが出来た。特に英会話で使える表現、あまり使わない表現などは、実際に話してみないとなかなか分からないと思う。海外に行くことは簡単には出来ないが、日本でも、英語を使う機会は大切にしたい。

(応用化学系・学部2年)

今回のオーストラリア超短期留学で私は初めて海外に行った。行く前は海外に行くことに対する怖さや不安が大きかったが、オーストラリアに行ってみると日本人が現地にもたくさんいる上に、日本語を話せる人も多いため緊張することなく過ごすことができた。驚いたのはアジア系の人が多いことだ。勝手なイメージだが、白人が多いと思っていたので少し驚いた。学生の国籍も様々で多国籍国家であると感じた。どの国からの留学生も自分と同じ国の友達を簡単に見つけることができるため、留学しやすい国であると感じた。しかし、授業を受ける学生の様子を見てみると国ごとに固まっている様子が観察できた。特に中国の学生が集団で集まっていると感じた。やはり、自分と同じ背景を持つ同じ国の学生で仲良くなってしまうのかなと感じた。

食事は中華やイタリアンなどのお店がたくさんあり、どの国の食べ物も食べることができた。どれもボリュームがあり、とても美味しかった。驚いたのは、お寿司のお店が多いことだ。学食にもお寿司があり、日本よりも多くのお店があるのではないかと感じた。不思議な体験だった。

メルボルン大学はとても広く開放的な大学であった。緑が多く、外で休めるスペースなどもあるので気分転換ができてよいと感じた。また、大学内にカフェがいくつかあるのもよいポイントだと感じた。毎日違う場所で食事を楽しむことができる。講義はシアターで行う

ものが多かった。すべての授業がスライドを見せるものであった。日本では黒板をつかう授業もあるので違いがあるのだなと感じた。生徒たちは熱心に授業を聞いていて、授業中は静かであった。質問する学生もいて、積極的に授業に参加していると感じた。

オーストラリは初めて海外に行くのに適した国であると感じた。とても住みやすい国である。今回の派遣で海外に行くことに対するハードルを下げる事ができた。日本とは違う文化や人に触れることができるととても刺激的であった。機会があれば、ぜひ他の国にも行き視野を広げたいと感じた。

(生命理工学系・学部2年)

実は、今回の派遣は、大学生なのだから1年に1回は留学しなければならないという固定観念からアプライしたものであり、決して、オーストラリアに行きたかったから申し込んだわけではない。超短期で得られるものは少ないことは、去年の英国派遣を経験した私は十分に分かっていて、とりあえず行ってみるという気持ちでこの派遣に臨もうとしていた。しかし、振り返ってみれば、1日1日を過ごしていくうちに、オーストラリアで勉強したいという気持ちが強くなっていった。この気持ちの変化を生じさせたのは、紛れもなく、メルボルン大学の授業である。正直に言えば、去年の英国派遣では、まともに授業を受けることなく帰国したため、海外の大学のイメージをとらえきれずにいた。しかし、今回の派遣では、現地の学生と混じって授業を受けることができたため、日本の授業と比較することができたり、生徒の特徴をとらえられたりと、多くの情報を得ることができた。特に、現地の学生の授業態度と日本の学生のそれは、かなり異なるものであり、衝撃的であった。また、授業スタイルも様々であり、日本のように単調に教授が黒板にチョークを走らせるという授業は一つもなかった。他にも、キャンパス内にカフェがあったり、歴史的建造物がたくさん存在していた。これらの情報を1週間のメルボルン大学での生活から得ることにより、海外の大学のイメージを鮮明にすることができた。そして、現在、海外の大学への長期留学に一種の憧れすら抱いている。これほどまでに良い刺激となったため、海外の大学への留学を漠然と考えている人にはおすすめである。

感動したのは、大学だけでなく、観光も素晴らしかった。特に、フィリップ島でのペンギン観察は、日本では決してできないことであり、忘れられない思い出となった。また、ボンダイビーチとキルダビーチは、日本の海と比べると、かなりきれいであり、かつ、気持ちがよくかった。オーストラリアに来たら、是非この3つの観光地は訪れるべきである。

(理学部情報科学科・学部3年)

私はそもそも、英語圏の学生と交流することで自分の語学力を高めたいと思ったことがきっかけで、今回の超短期派遣プログラムへ参加した。オーストラリアは比較的治安が良い国であるとうかがってはいたものの、海外経験がほとんどないこともあり、渡航前は緊張でいっぱいだった。しかし実際に訪れてみると、想像以上に過ごしやすい国であることが分かり安心した。特にメルボルンの街は英語のみならず日本語や中国語で溢れており、様々な人種のいる場所であるという印象を受けた。そのため、例えば私たちが街歩きをしている際にも、いわゆるアウェー感は感じなかった。

今回の派遣による収穫は主に2点あると思っている。1つ目は英語によるコミュニケーションの実践、もう1つは専門分野の講義へ参加できたことである。専門分野の学習に関しては、滞在期間が短すぎることもあって当初はさほど期待していなかったが、いざ受講してみると、講義のレベルの高さに感銘を受けた。教授が説明に使うスライドは情報量が多く、授業中であっても学生側から活発に質問が飛び交っていた。自分も今後このような環境で学習が出来ればと強く思った。

英語そのものに関して言えば、自分の中で様々な課題が見つかった。日本語クラブでの交流の際には、英語で完全に物事を伝えられないことがしばしばあり、もどかしさを感じた。講義の内容についても、自身のリスニング力がより高ければ更に鮮明に理解出来ただろうに、と後悔せずにはいられなかった。一方で、自分の英語力をより詳細に知れたという意味では、今回の派遣は非常に意義深いと思う。特に、現地の学生との意思疎通が成功したときの喜びは計り知れなかった。今回の経験を糧にして、今後は英語をより熱心に学ぼうと決意した。

今回の超短期派遣プログラムが私にとって有意義なものになったのは、ひとえに派遣に関わってくださった皆様のおかげであると思う。今回の派遣を快諾してくれた両親、派遣のサポートをしてくださった先生方、そして一緒に参加したメンバー、その他私と関わってくださった全員に感謝を申し上げます。

(生命理工学部生命工学科生体分子コース・学部3年)

今回のオーストラリア派遣は自分にとって初めての海外派遣であった。そのため海外での生活や現地人とのコミュニケーション、また大学で受ける授業の理解などの不安要素がいくつかあったが、実際には、オーストラリアの派遣において、それらの不安を払拭するだけの大変貴重な経験をすることができた。まず生活についてだが事前に聞いていた通り治安が良く大変過ごしやすかった。現地人も様々な国籍の人がおり、皆が同じ立場にある

という事実から安心感を得ることができた。それが現地人の気さくで寛容な雰囲気を作っているのだと感じている。また思ったよりも健康に配慮した店や食品が多く、大学の授業でFOODの授業があることから健康志向が日本に比べて進んでいる印象を受けた。コミュニケーションについては現地人の人柄もあり、街中で会話が普通に行われていて、大学で参加した日本語クラブや部活動でもコミュニケーションの取りやすさを強く感じた。海外で築いたコネクションは今後の財産になると強く感じている。授業も電子ツールを使った授業を展開していて、視覚的にわかりやすく、かつ設備の規模の大きさを利用したより質の高い内容の授業が行われていた。正直これらの授業を受けられることにあこがれを抱かずにはいられなかった。これらの経験を通じ、海外留学自体の敷居が自分の中で下がったように感じた。以前は漠然と海外に行き、今までにない経験をすることで価値観に違いを知りたいというような曖昧な動機を持っていたが、留学を経験した後では海外留学を行うことのメリットが大変顕著に存在していることを知ることができた。漠然とした経験ではなく、海外で達成したいと思える具体的な目標とそのために必要な長期の留学というものを今回の海外派遣で見据えることができた。オーストラリアは生物を特に医学の分野に生かすアプローチが多く、画像処理やシミュレーションを行うための授業を、生物系を対象に行っており、これらは今後研究を進めていくうえで必要になる知識であるように感じている。そこでしか学べないこと、また必要だと感じる内容があれば、院に上がったからでも長期の留学にチャレンジすることを検討していきたい。

(工学部国際開発工学科・学部3年)

数日間メルボルンとシドニーで生活して感じたことは、とても住みやすい場所であるということであった。オーストラリアの人々は皆明るく親切で、街中でも自然体でいることができた。「働きすぎている日本人」を常に見ていたためか、オーストラリアの人々は人生を楽しんでいる様子がひしひしと伝わってきた。また、オーストラリアが多民族国家であるために、英語が母国語ではない人が多い。そのためか、拙い英会話でも親切に耳を傾けてくれる方が多く、嬉しく思った。

また、大学の充実度がとても高かった。今回の超短期派遣では、実際に海外の大学で1週間授業を受け、生活することで留学体験をすることができた。ニューサウスウェールズ大学・メルボルン大学の両者が、カリキュラム、雰囲気ともに魅力的な大学であり、こんな大学であったら、喜んで通いたいと感じた。現地の学生支援課の方々も「学生に対する支援が手厚い！」と、自信を持って断言しており、それほどまでに自慢できるような体制が整っていた。

留学の際、大きな壁となるのが語学である。私は英語が苦手で聞き取るのも話すのも得意ではないが、ジェスチャーを交えることでコミュニケーションをとることができた。もう少し話すことができればよかったと思う場面は何度かあったが、そのたびに現地の方々の優しさに救われた。語学力を理由に海外留学をためらっている人には、環境面からもオーストラリアは是非お勧めしたい場所であった。次回海外に行くときには、より英語が得意になった状態でもっと多くの人と積極的に交流したいと思う。

大学の単位のために参加したこの超短期派遣であったが、このように日本にいただけではわからないことを体験することができた。勉学面のみならず、観光地としてのオーストラリアも素晴らしいものであった。個人的にはシドニーのオペラハウスの特徴的な建築様式が印象に残った。それだけではなく様々な場所に英国式の建築物があるため、散歩をしているだけで楽しむことができた。今後も留学を視野に入れつつ、より多くの外国を訪れてみたいと思う。